

裏面白紙

64

官報報告

宗

丙

八年十月十五日

立憲大臣八年十月十五日
決裁大臣年月日

宗秩寮



宮内事務官



大臣



次官



故從三位千種忠顯分九十九名贈位
件

大正八年十月十五日
臺帳記入十月十五日官報

宮

内

事務

官

二



故從三位千種忠顯外九十九名

贈位ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

大正八年十一月十一日

内閣總理大臣原敬

内

閣

内閣 第一〇一号

大正八年十一月十日

内閣書記官

内閣總理大臣

内閣書記官長

二月拾五日 賜

故從三位	千種忠顯
故從四位上	松平頼重
贈正四位	羽倉東滿
故從四位下	青山忠裕
故從四位下	脇坂安宅
故從五位下	淺野長直
内閣	
故從五位下	仙石政辰
故從四位下	水野勝成
故從四位下	蜂須賀至鎮
故從四位下	山内一豊
故從四位下	山内忠義
故從五位上	安藤定爲
故從五位勲四等	小室信夫
故從五位下	石丸定次
故從五位下	関政富
故從五位下	赤塚正賢

故正六位上 澤 顯連

故正六位 池田 種徳

故正七位 緒方 郁藏

特旨ヲ以テ位階追陞セラル

故 和田 正武

故 藤林 泰助

故 和田 賢秀

故 和田 正朝

故 橋本 正高

故 恩地 左近

内

故 河合 隼之助

開

故 小島 忠太

故 宇佐 輔景

故 大高坂 松王丸

故 木下 彌八郎

故 朝山 素心

故 野田 希一

故 和田 義亮

故 三宅 新次郎

故 五井 藤九郎

腹

故松浦宗案
故足立重信
故谷重遠
故長岡恂
故伊藤和兌
故田村清兵衛
故森田治良兵衛
故眞名井純一
故山川大作
故間五郎兵衛
故各務相二
故田中治兵衛
故吉川俵右衛門
故山中善右衛門
故田村平一郎
故三間半二
故北村義貞
故菅野狷介
故丸尾重次郎
故小山六郎

[illegible]

故 木内順二

故 三上景雄

故 安藝三郎左衛門

特旨ヲ以テ位記ヲ贈ラル

故從三位 千種忠顯

贈從二位

故從四位上 松平頼重

贈正三位

贈正四位 羽倉東満

故從四位下 青山忠裕

故從四位下 脇坂安宅

故從五位下 浅野長直

故從五位下 仙石政辰

故從四位下 水野勝成

故從四位下 蜂須賀至鎮

故從四位下 山内一豊

故從四位下 山内忠義

贈從三位

故 和田正武

贈正四位

故從五位上

安藤定爲

故藤林泰助

故從五位勲四等

小室信夫

故和田賢秀

故和田正朝

故橋本正高

故恩地左近

故從五位下

石丸定次

故河合隼之助

内閣

故小島忠太

故宇佐輔景

故從五位下

関政富

故大高坂松王丸

贈從四位

故木下彌八郎

故朝山素心

故從五位下

赤塚正賢

故野田希一

故和田義亮

故	故	故	故	故	故	故	故	故
伊藤	長岡	谷	足立	松浦	村上	太田	土肥	多田
和		重	重	宗	義	次	大	宗
兌	恂	遠	信	案	書	郎	作	太郎

故田村清兵衛
故森田治良兵衛
故眞名井純一
故山川大作
故間五郎兵衛
故各務相二
故田中治兵衛
故吉川俵右衛門
故三代目山中善右衛門

故正七位		緒方郁藏	故	田村平一郎	故	三間半二	故	北村義貞	故	菅野狷介	故	丸尾重次郎	故	小山六郎	故	宮本池臣	故	西村莊兵衛	故	吉田拙藏	内	故	村上源藏	故	安藤伊右衛門	故	伊王野坦	故	上田及淵	故	野崎武左衛門	故	坂田丈平	故	本莊重政	故	平山角左衛門	故	大代 栖原角兵衛	故	笠松左太夫
------	--	------	---	-------	---	------	---	------	---	------	---	-------	---	------	---	------	---	-------	---	------	---	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	--------	---	------	---	------	---	--------	---	-------------	---	-------

故田中善吉

故賀川玄悦

故高良齋

故楠藤吉左衛門

故工藤剛太郎

故南薰風

故村岡宗四郎

故木内順二

故三上景雄

故安藝三郎左衛門

内閣

贈從五位

故五位 門脇重綾

特旨ヲ以テ位階追陞セラル

故五位 門脇重綾

贈從四位

故從三位 千種忠顯

後醍醐天皇ノ寵眷厚ク笠置潛幸六波羅
ノ移御隱岐ノ行在皆常ニ奉侍シテ日夜憂
ヲ慰メ奉リ衣ヲ護シテ島ヲ脱シ海ヲ踰ヘ密
笠崎宜シキヲ得テ作者ニ入り船上山ニ陪從シ山陰
ノ兵ヲ部署シ皇子恒良ニ屬屬シテ京師ヲ復セムト
シタヒハ利アラサリモ諸將ノ入援ニ會ヒテ六波羅
遂ニ陷リ車駕還幸ノ際ニハ先驅ヲ拜シ皇子ヲ護

内

関

良ノ入洛ニ方リテ亦後乘ニ供奉シ建武中興ノ大業
成リテ功ニ依リ從三位ニ陞叙シ彈正大弼ニ任セラル
足利尊氏ノ叛シテ京師ヲ侵スヤ名和長年結城親
光等ト共ニ出テ瀨多ニ防キシモ王師利アラス乘輿
叡山ニ幸スルヤ亦之ニ扈從シ尊氏敗レテ西ニ走リ
軍ヲ九州ニ移カリテ再ヒ關ヲ犯スヤ楠木正成攝津
戰死シテ王師敗績シ京師陷リ輦輅復叡山
ニ幸セラル尊氏進テ延暦寺ヲ攻メ諸將力拒シ
テ利アラス忠顯遂ニ西坂ニ戰死ス

故從四位上 松平賴重
賴重ハ德川賴房ノ長子同光園ノ兄
ニシテ舊高松藩主初代ナリ封内ノ農
事ヲ勵マシ灌漑水利ノ便ヲ開キ殖産
ノ業ヲ起シ深ク工藝ニ心ヲ用ユ殊ニ
皇室尊崇ノ念厚ク山陵ヲ修理シ
又屢々御供ヲ獻セリ終始至誠ヲ以
テ國家ニ竭クセル所ノ功績固ヨリ甚
カラス

内

閣

京都伏見稻荷社司官

贈正四位 羽倉 東滿

明治十六年二月二十七日賀茂貞真淵本居宣長
平田篤胤と共に正四位ヲ贈ル東滿貞真淵宣長三
人ヲ稱シて世ニ國體ヲ三大人ト爲ス東滿其ノ中ニ於
テ先倡者タリ真淵ハ其ノ門ニ出テ宣長ハ其ノ學ヲ
承ク篤胤亦統リ繼テ伏見稻荷ノ祠官タリ初メ
此法院官ニ仕ヘ後江戸ニ遊フ時皇道ノ陵夷ヲ慨シ
テ古典ヲ研鑽シ享保年間漢學ヲ興隆セル時流

内

関

ノ中ニ卓立シテ挺身國體ヲ唱ヘ將軍吉宗ノ命ヲ
以テ諸國貢獻ノ舊記及幕府文庫ノ官本ヲ
査閲シ校訂辨疏詳悉ヲ極メ出雲屋土記考ヲ
作リテハ原本ノ誤謬ヲ正シ偽頭類聚三代格
考ヲ作リテハ本文ノ註忘ヲ辨駁シテ偽本ノ跡ヲ絶
クシム吉宗深ク推服シ永ク幕下ニ留メシムトシタモ
病ニ稱シテ仕官ヲ辭シ伏見ニ歸リテ復出テ晩年書
ヲ幕府ニ呈シテ國體學校ヲ京都ニ創建セムコトヲ請
願シ事ヲ行ハレムトスルニ方リ病ニ歿ス

舊丹波篠山藩主

故從四位下青山忠裕

文化元年ヨリ繼續シテ老中ノ職ニ在リ幕政ノ樞機ニ參與スルコト三十二年其ノ間彼ノ有名ナル大上天皇尊號問題ト相待チ老中ノ首班松平定信ヲシテ苦心慘憺セシメタル大御所尊稱事件ニ關シ定信ノ極力拒否シタル為將軍家齊ノ間ニ確執ヲ生シシル如キ多年ノ懸案モ忠裕老中ト為ルニ及ヒテ將軍ヨリ再ヒ下問アルニ對シ將軍家宣ノ父綱重ヲ追尊シ

内閣

テ大相國ヲ贈リ將軍吉宗ノ父光貞薨去ノ後モ遂ニ贈官ノ議ナカリシ例ヲ與テ全前尊稱ヲ贈ルノ僭踰ニ似タルヲ論シ定信ノ拒否固ヨリ其所ナルヲ最モ明晰ニ説キテ將軍ノ意ニ慍ヒシ為事竟ニ六般ハワトヲ得タリシマリ文政五年相馬大作トシテ知ラル南部侯ノ家臣下斗米將真ノ獄ヲ斷シ將真ノ素志ヲ世ニ明シナカラ其ノ大法ヲ犯セルコトヲ論シ遇スルニ七人叩ノ士ヲ以テ刑テ一モ累ヲ主家ニ及ホサレノス將真ヲシテ首肯シテ刑ニ就カレシノ藤田東湖ヲシテ其ノ裁斷ノ辭令ヲ讀ミ感激流涕セシメタル如キマリ將軍家齊太政大臣

任せし世子家慶父從一位ニ叙セラレタルニ方リ謝恩
ノ特使トシテ差遣セラルルヤ朝廷ノ禮法ヲ守リ誠
敬ヲ生ハス他ノ謝恩使タリシ井伊直亮松平定永儀
衛ヲ鮮麗ニシ而カモ朝典廷禮ヲ重セサリト今其
ノ選ヲ殊ニシ最モ宸慮ニ稱ヒ令名播紳ノ間
重キヲ致セルアリ其ノ封地ニ於テハ藩鎮員ヲ増筑シ
テ世子教ノ振興ヲ圖リ有用ノ巨籍ヲ翻刻シテ
竹篠山版ノ名一巻ニ高キヲ致セシマリ幕府政ニ百六
十餘年ノ間ニ老中タリシ者ノ白眉ヲ以テ稱セラル

内

閣

舊播州龍野藩主

故從四位下 脇坂安宅

幕府ノ末造尊王攘夷ノ論正ニ鼎沸セル安政元年四月京都皇宮ノ大火上アリ安宅京都所司代トシテ事變ニ處シ措置宜シキヲ得テ宸慮ニ稱フ皇居造営ノ工起ルヤ之ヲ奉行トシテ其ノ任ニ當リ當時朝廷ノ信賴ヲ受クル者ハ幕府ニ疑懼ヲ抱カシムルヲ例トスルノ時態ナルヲ憚ル皇居ノ規模ヲ廣クシ宮殿ノ楹造ヨリ庭苑ノ區域ニ至ル

内

閣

マテ從來ノ狹隘粗笨ナリシニ比シテ其ノ舊觀ヲ改メシメ暮年ナリスレテ其ノエヲ竣成シ且幕府ニ要請シテ皇室ノ御賄料ヲ増額セシメ宸威殊ニ渾シ後轉シテ老中トナリ井伊直弼大老ナル時ニ處シ其ノ朝暮ヲ荷ヘル身ヲ以テ常ニ能ク皇室優遇ノ事ニ盡セリ

舊播州赤穂藩主

故從五位下 淺野 長直

正保元年常州笠間ヨリ移封シ赤穂所近ノ海岸塩
田ヲ營ムニ適スルヲ相シテ海面ヲ埋築シ新濱ナル村
ヲ創設シテ製塩場ノ業ヲ興シ以テ赤穂塩ノ般耳價
ヲ得セシムルニ至リ其ノ簡易水道ヲ敷設スルコト二里
餘以テ所近町村ノ飲用水ヲ潤澤ナリシノ土地ヲ開墾
シ溜池ヲ築修シ惠澤長ク後代ニ及フモノ少カラス寛
文二年京都禁裏ノ造營ニ與カリ一小藩ヲ以テ

内閣

鉅額ノ工費ヲ負擔シ以テ其ノ工ヲ完成セリ當時王
室式微ノ際ニ方リ能ク造營ノ工ヲ竣ヘタニ資ヲ傾ケ
タルハ其ノ功勞中ノ白眉トシテ見ルヘキモノトス居常
饒ナラ好ミ士ヲ待ツト厚シ寛文六年山鹿素行ノ
赤穂ニ詣セシムルヤ迎ヘテ過スルニ賓師ヲ以テシ老臣
大石良重ト共ニ學友ヲ振起シ士節ヲ激勵セリ
赤穂ノ士風蔚然トシテ其ノ間ニ美良ハレ後年良
重ノ子大石良雄四十七歳士ノ魁トシテ士道ノ精華
ヲ發揮シタルモノ歟此ノ際ニ胚胎セリト謂フ可シ

舊但州出石藩主

故從五位下仙石 政長

享保安永、當時自皇室ヲ尊山宗スル、風尚未シ
興ラサル、際ニ在テ、尊王ノ志篤ク京都ニ在ル
毎ニ日々紫宸殿ノ門前ニ詣リテ、肅拜スルヲ例トセ
リ、其ノ中宮ニ自皇子降誕アラセシサルヲ喜ビ、日々賀茂
ニ詣リテ降誕ヲ祈リ、端願ノ期ニ及ヒテ神符ヲ受ケテ
テ中宮ニ奉リテ為ニ内謁ヲ賜ハリタル如キ、以テ其ノ志
如何ニ尊王ニ篤カリシヤヲ知ルニ足ル、其ノ藩政ヲ親

内

閣

宰スルコト四十餘年、治績觀ル可キモノ、ツカナルハ、國
リヨリ待タス、當時諸藩唯武技ヲ競フ、モ在リ、
兵書ノ讀ミ延テ、兵術ノ訓練ニ從フ、相並テ經書
ヲ讀ミ國語ヲ讀ミ、新ニ興テ、學校ヲ設ケテ教化ヲ興シ
文武ノ兩教ヲ併セ振ヒタルハ、士道ノ作興、文教ノ隆
日ニ資益スル所多シ、其ノ明和年間ヲ以テ、陶磁器
ノ製造ヲ保護、獎勵シ、地方物産ノ繁殖ヲ圖リ
タルハ、亦以テ治績ノ一ニ加ヘラル可キモノ、又後年幕府
ノ末途ニ際シテ、勤王ノ志士ハ藩内ニ出テ、維新ノ際、藩
主ノ挺身正ニ勤メタルハ、皆政長ノ遺圖ニ出ツ

故從四位下 水野 勝成

右勝成ハ天正以降諸名将ニ隨ヒ各地
ニ轉戰シテ殊功アリ慶長年中徳川
家康ニ屬シ軍役ニ盡セルモノ斷カラ
ズ因テ大和ヨリ備後ニ轉封シ城ヲ福
山ニ築キテ之ニ居ル能ク封内ノ河川ヲ
治メ池溝ヲ鑿金チ多ク新田ヲ開墾シテ
領民ノ生産業ヲ奨勵シ以テ公益ヲ興
セリト云フ

内

関

故從四位下蜂須賀 至鎮

至鎮ハ蜂須賀家政ノ子ニシテ天正十四
年正月二日德島城ニ生ル慶長中封
ヲ繼キ爾後阿波淡路二國ヲ領ス稟性
寛仁ニシテ大度アリ克ク父ノ遺業ヲ承
ケ良法ヲ制シテ封内ニ施ク庶民饗テ仁
政ニ悦服シ上下以テ安寧ヲ保テリ特ニ殖
産興業ニ心ヲ用ヒ藍種ノ播殖ヲ鹽
田ノ開作ノ如キ大ニ國中ノ富源ヲ啟
發シテ今日ノ繁盛ヲ見ルニ至レリ加
之勤王ノ志厚ク其ノ天朝ニ竭ス所
洵ニ賞スヘキモノアリ元和六年二
月二十六日齡三十五ニシテ歿ス

故從四位下山内 一豐

一豐ハ戦亂ノ世ニ處シテ武功ヲ夫天ニ
善ク亂後ノ民治ニ心ヲ盡クセリ近江播
磨河内若狹遠江伊勢ノ各封地ニ於テ
孰レモ治績ヲ舉ク慶長五年土佐就
封ノ後ハ其ノ長曾我部氏舊封ノ難
治所タルニ係ラス能ク拓地墾田以テ農
事ヲ奨勵シ經營宜シキヲ得テ一ト藩ノ民
福ヲ安固ナラシムルニ至レリ其ノ功績
洵ニ顯著ナリトス

内

関

故從四位下 山内 忠義

忠義ハ舊土佐藩主ニシテ山内一姓ノ
嗣子ナリ慶長末年襲封以來専ラ善
政ヲ施シ封内ノ水利土功殖産興業ノ
如キ總ヘテ國利民福ヲ増進センコトヲ圖
レリ野中兼山等ノ賢材ヲ舉ゲテ方策
ヲ助ケレム河川ヲ疏通シテ水害ヲ除キ灌
漑ヲ便ニス墾田築港殖林漁業皆以テ
國家ノ利用厚生ノ道ニ貢獻セルモノナ
リ其ノ功績頗ル顯赫トス

内

關

内匠頭

故從五位上安藤定為

伏見宮第六世知輔親王ノ王子知茂王ノ曾孫ナリ
 王松永久秀ノ亂ヲ避ケテ外戚安藤氏ニ賴ラレタル
 地丹波國南桑田郡千年郷小口村ニ在リ^{醫者ニ避レ}
 世ヲ終フ後其孫定明故ヲ以テ伏見宮貞清親王ニ仕
 親王ノ嫡孫知尚親王ノ子貞致親王出テテ實母ヲ納
 言局ニ從ヒ局ノ從弟タル定為ノ家ニ賴ラルヤ定為奉
 仕ニ恪勤力ヲ輔導シ悉クス知尚親王先ツ薨死去セ

内

関

シレ^{承應三年}貞清親王知道親王相繼キテ薨死シ
 給ヒテ伏見宮家ノ御繼嗣ナキニ方リ定為宮家ノ家臣
 等ト議シ貞致親王ノ在マスコトヲ京都所司代板倉周
 防守ニ進言シ親王ヲ周防守ヲ其ノ館ニ條城ニ訪ヒテ事實
 ヲ具陳シ遂ニ自カラ江戸ニ赴クノ任ニ當ラザル旋大ニ力ヲ盡
 府ヲシテ親王迎立ヲ議ヲ決セシムルニ至ル親王ノ姉宮將軍
 家ニ降嫁アラセラルヤ定為供奉シテ東シ將軍之ヲ引見
 ス爾來毎年歳首ヲ以テ伏見宮ノ賀使ト為リ東ス後
 曾祖知茂王老後ノ志ヲ繼キテ禪ニ隱レタルモ徳川光
 圀ノ信任スル所ナリニ子贈從四位安藤為實貞贈正五

14
位安藤為章ヲ以テ光圀ノ臣籍ニ入レシメ以テ大日本史
並禮儀類典編纂ノ業ニ與ラシメ定為ハ京都ニ
居テ諸公卿ノ間ニ往來シ古文字書ヲ江戸ニ送致シ
光圀ノ事業ヲ助ク元禄十五年八月卒ス年七十六其
ノ伏見宮家ヲ將ニ絶トスルニ存セシメタルノ功ハ光圀
修史ノ業ヲ終員ニ終シタルノ績ト併セテ勅ス可キモノアリ

内

閣

丹後國與謝郡岩瀧村三箇戸

故貴族院議員從五位勲四等小室信夫

昔希譴將ニ至ラントシテ官津ハ藩ノ來リ捕フルヲ逃レ京都ノ支
店ニ在テ生絲縮緬ノ問屋業ニ従事スルニ志ヲ勤メ志
士ト交リヨリテ德島ハ藩ニ擢用セラルト士班ニ列セリ其持
院足利氏ノ木像ヲ斬ルノ與ニ參ワリ梟首ノ榜ニ書レル
斬刑狀ハ信夫ハ手ニ成ル昔希綱ヲ遁テ肥後長門ニ去リ
德島ノ藩邸ニ潜ミシ時同志ノ藩獄ニ投セラル見テ
自首シ藩獄ニ殺サル後長ハ藩ノ幕府ニ建言シタルカ

内

関

為ニ寛假セラル出獄ヲ得タリ德島ハ藩ニ大參事トシ淡
路獨立ノ紛擾ヲ調停シタルモ事成ラズヨリ侯府時蜂須
賀茂韶ニ隨フニ歐米ヲ視察シタル東京馬場町ノ鐵
道敷設ヲ唱ヘ立憲政體ヲ查西歐ニテ歸朝ノ後我
施スヘキ安本ヲ草シ後藤家二郎板垣退助副島種臣等
ヲ説キ連署者シテ民選議院設立ノ事ヲ建白セリ大阪
會議ヲ催シテ木戸孝允大久保利通後藤家二郎等ヲ
會同シテ立憲政體ノ基ヲ定メタルハ信夫ハ幹旋ニ
出ツ後品川十藏其共同運輸會社ヲ創設スルニ際シテ
銳意其ノ事ニ當リ遂ニ外船ノ航路壟斷ヲ擅ニ

スル勢ヲ挫キ今ノ郭船會社ニ基石ヲ置ケリ其ノ創
設シタル事モ亦會社ノ弊カラス之ニ社長或ハ重役トナリテ
大ニ民衆ヲ發揚スルニ力ヲ竭クセリ大阪船渠港ノ如キモ
亦其ノ首倡ニ致スレリトナフ

内

閣

大阪町奉行石見守

故從五位下 石丸 定次

寛文三年大阪町奉行ヲ命セラレタル以來職ニ在ル
ト十九年銳意市政ノ改善ヲ圖リ各種商業ノ爲
ニ成規ヲ立テテ率由スル所ヲ明シ以テ大阪殷目ノ基
ヲ樹テタリ十人面替ノ制ヲ創メテ幕府金銀ノ出納ヲ
掌ラシメ併セテ一般貸付金ヲモ辦理セシメテ金融ノ疏
通ヲ圖リシ如キ質屋ノ制ヲ改メテ密書ヲ付シテ之ヲ
監督シテ細民ノ金融機關ヲ整肅スラシメテ如キ天

内閣

滿吉物市場ヲ保護シテ新市場ノ開設ヲ禁シ既得
ノ利權ヲ尊重シテ漫ニ競争スルノ弊ヲ杜ギシ如キ三所綿
問屋ノ制ヲ定メテ保護ヲ加ヘ取締ヲ嚴シテ綿商組
合ノ基礎ヲ確立セシメシ如キ洛雷火災大旱暴風
雨海漲洪水等ノ災厄ニ處ニ救済治安ノ處措宜シ
キ得タルカ如キ木賃宿ヲ許シテ貧民者ノ雨露ヲ凌
ニ便セシメテ新賣買ノ法ヲ定メテ一律ニ歸セシメ油商
ノ紛紜ヲ解キテ枰目ヲ修正シ相場ヲ設ケシメタルノ類
ニ至ルマデ治績トシテ見ル可キモノ極メテ多シ

舊備中新見藩主

故從五位下關政富

弊政惰俗ヲ振ヒ民次貝公帑ヲ充ツシ藩學ヲ開
キテ文武ノ教ヲ張り庠序學校塾ヲ設ケテ藩民
ハ蒙リ啓キテ藩外遊學ヲ秀才ニ其ノ學資ヲ補
助シ寢貝厩ノ當時ヲ以テ備中山間ノ小藩ニ早シ
聖廟ヲ校庭ニ建テ其ノ楫造輪奐ノ美ヲ盡シ
シテ固山藩ノ聖廟ニ頌頌シ春秋二期自カヲ釋
ハ米ノ式典ヲ行ヒタルハ中國文教ノ一異彩タリ索ソ

内 關

難キノ珍書ヲ集藏シ其ノ數三千五百冊ノ多キニ
及ヒシハ當時四隣ノ大藩ヲ驚カセリ齡三十八歳ニ
シテ歿セラルシカ爲其ノ宿志半ヲ達スルニ過キス其
ノ封亦大ナラサリシカ爲其ノ規模一代ヲ勤カスミヲ
サリシハ最モ惜シ

後水尾天皇奉仕儒臣

故從五位下 赤塚正賢

後水尾天皇奉仕シ天皇讓位ノ後忠勤渝ラス前
後五十餘年信任眷寵共ニ深シ後水尾上皇講學子
ノ志篤ク正賢ヲ召ミテ孟子ヲ講セシメ給フ其ノ孟子初
篇ヲ進講シ奉リシハ明暦四年ニ在リ上皇御感深ク特
ニ大學ノ一句止至善ノ三大字ヲ書シテ正賢ニ賜ヒ子孫
文體ヲ務ムヘキ旨ノ宸翰ヲ賜ハル正賢ノ召サレテ詩歌
ノ宴ニ侍シ下問ニ奉答シタルコト亦屢次後水尾法皇

内

関

崩御ノ後致仕シ元禄五年二月八十ノ高齡ヲ以テ卒
ス幕府ノ勢威正ニ熾ニシテ上皇僅ニ心ヲ講學子
ニ潜メ給フノ時幕吏ノ忌諱ヲ顧ミス孟子ノ如キ
政道ヲ論スルヲ書テ進講シテ屈セサリシハ以テ正賢
王ヲ崇ヒ霸ヲ斥ケタルノ志ヲ視ルヘク後代尊王ノ
精神ニ寄與スル所少カラサルヲ知ルヘシ

吉野朝石州邑智郡青杉城主

改正六位上 澤 顯連

三河守ヲ授ケル石州邑智郡ノ豪族タリ後醍醐天皇ノ隱岐ヨリ船上山ニ幸セラレ名和長年ノ義兵ヲ擧グルヤ三隅入道等ト共ニ馳セテ赴キ行在ヲ守護シテ尋ニ源忠顯ニ屬シ車加馬ノ還テ供奉シ正六位上ニ叙セラル其ノ後足利尊氏ノ叛亂アリ諸將往往之ニ黨シタルモ顯連常ニ勤王ヲ以テ一貫シ後正平五年足利氏ノ勢愈々熾ミシヲ吉野朝ノ軍振ハサル方ヲ義兵ヲ起シテ青杉城ニ據ル足利氏ノ諸將之ヲ聞テ大ニ驚馬キ高師義隆ヲシテ大軍ヲ來リ攻メシニ顯連防備ヲ修メテ防戦大ニカメタリシモ遂ニ利アラズ城ニ火シテ自殺ス

内閣

改正六位 池田 種徳

右種徳ハ舊廣島藩士ナリ徳太郎ト稱シ
快堂ト號ス夙ニ學ヲ好ミ諸方ノ名家
ニ從學シテ識力大ニ進ム安政年間志士
ト提携シテ攘夷ノ實行ヲ企テシカハ幕
遣ヲ獲テ獄ニ入ル實ニ文久元年ナリ後
赦サル文久三年將軍家茂上洛ニ際
シ清川八郎等ト護衛ノ選ニ當リ新徴
組ノ領袖タリシカ幕府カ攘夷ノ盟約
ニ背ケルヲ知リ尊攘ノ宿志達スヘカ
ラサルヲ以テ俄ニ新徴組ヲ脱ス慶應
年間ニ藩主ノ信任ヲ承ケ執政ト將曹ニ
從ヒ船越衛等ト國事ニ周旋シ明治
元年軍務官權判事ニ擧ケラレ東北遊
撃軍副參謀トシテ戰功アリ凱旋ニ當
リ朝廷厚ク金圓ヲ賜ヒ功勞ヲ賞セラ
ル爾後諸縣ノ長官ニ歷任シ行政上ノ
事蹟多シトス

大阪蘭方醫蘭學者

改正七位 緒方 郁藏

贈從四位緒方洪庵、門ニ在リカラ洋籍ニ肆ミシ
精勤ニシテ其ノ愛スル所ト為リ結ヒテ兄弟ト為ル因テ
本姓大石氏ヲ改メ緒方氏ヲ冒シ洪庵、醫蘭治教
道ヲヲ輔ク後別ニ其ノ居ヲトシテ業ヲ開ク世ニ
南北緒方ノ目アリ慶應二年土佐藩ニ聘セラレ
テ醫蘭局ノ教頭ト為ル明治元年ハ藩制改革後
大阪ニ家居シ藩ノ囑ヲ受ケテ翻譯ニ從フ三年

内閣

文部省、醫蘭學校及所屬病院ヲ大阪ニ建ツル
ヤ徵シテ少博士ニ任シ正七位ニ叙ス若者書譯述
甚多シ醫學徒其ノ門ニ萃マリ一時人材ノ淵蓋シ
ルト洪庵、伯仲ノ間ニ在リ

吉野朝和泉守

故 和田正武

延元四年後醍醐天皇ノ吉野ニ崩レ給フヤ楠正行ト共ニ行宮ヲ宿衛ス後正平十五年足利義詮ノ大軍ヲ率キテ天野行宮ヲ犯スニ方リ楠正儀ト共ニ赤阪城ニ據リテ之ヲ拒キ城中食竭キシヲ以テ夜龍衣シタルモ兵ヲ湊川ニ進ノテ還ル後正儀ノ出テ足利義満ニ降ルヤ正武其ノ宗族ヲ率キテ屢之ヲ攻ム文中年間足利氏ノ軍來テ天野行宮ニ迫ルヤ正武力拒シテ利氏ノ後龜山天皇ハ因テ吉野ニ還幸セラル弘和二年山名時氏ノ來テ泉州ヲ略スルヤ正武和田城ニ據リテ屢セス與テ族皆殲ル

内閣

24
舊有栖川宮家侍醫南

故 藤林 泰助

普山ノ號ヲ以テ蘭學ヲ諸俊ノ間ニ重セル本邦對
譯字書嚆矢トシテ知ラル贈從四位海上隨國ノ東
西韻會ニ就キ其ヲ拔キ謬ヲ訂シ隨國ノ校閱ヲ
得テ譯鍵ニ卷ヲ著ハシ後和蘭語法解ニ卷ヲ
著ハス譯鍵ノ一書ハ當時蘭書ヲ讀ム者ノ標
準トセラレ其ノ學術ニ功アリレコト極メテ大ナリシノミナラス
其ノ蘭學ノ講義ノ利便多カラシメ本邦文明ノ先
驅タリシハ他ノ蘭學ヲ諸俊固ヨリ及フ可カラス其ノ他醫
書本草書度量衡書等ノ翻譯亦皆當時ノ
權威トシテ推サル醫國壇ノ高才總テ治療ノ事ヲ主
トシタルニ泰助獨リ翻譯著作ニ潛心努カレンリ
泰西諸學振興ノ基ヲ樹ツ

楠正行從將

故 和田賢秀

延元三年源顯家ノ與テ應ニテ兵ヲ出シ顯家戰歿シ
弟顯信男山ノ守ヲ失シ赴援シケルモ及ハスニ還ル正平二年
楠正行ニ從ヒ細川顯氏等ト住吉ニ戰ヒ敵將ヲ截ル三年高
師直大舉來リ攻ムルヤ正行ニ從ヒ吉野行宮ヲ進解シテ
四條畷ニ戰フ賢秀乃モ善ク眉尖刀ヲ用ヒ郷向テ所敵ナシ正行
等ノ力竭キテ自刃スルヤ賢秀獨リ敵兵ニ混シテ師直ヲ
狙ヒ相距タルコト數歩ニ及ヒシモ賣ハズ即ノ一將ニ認メラレ後
方ヨリ足ヲ斫ラレテ踏レ竟ニ正行師直ト耦刺セムトシケル
志ヲ達スル能ハスニテ死ス

内

閣

楠正行從將

故 和田 正朝

26
正平三年兄賢秀ト共ニ楠正行ニ從ヒテ高師直ノ大軍
ト四條畷ニ會戰シ直ニ其ノ中堅ヲ龍裝フテ之ヲ破リ師
直ノ敗走スルヲ見從士追殺セムトシタルニ師直ノ騎ニシテ
我レノ歩ヲルヲ慮カリ給キ走ラ已レヲ追ハレテ返殺シテ之
ヲ刺サムトシ不幸謀顛語シテ高師冬ニ追殺セラル
其ノ志ヲ成スコト能ハス返ヘシ戰テ從兵悉ク歿シ正行等
亦既ニ戰死ス乃ケ還テ其ノ狀ヲ表スセムトシ南行ス時
ニ敵將ノ來リヲ薄ルニ遭ヒ之ヲ走ラス敵兵來リ射ル正
朝七矢ヲ被リ遂ニ殺サル

吉野朝主將

故橋本 正高

正平十四年楠正儀和正武等、赤阪城ニ據ルト相
呼應シテ平石城ヲ守リ以テ畠山國清ノ天野行宮地
侵入軍ヲ拒キシモ利アラス正儀正武等ト共ニ退キテ
金剛山ヲ守リ正儀ト共ニ出テ足利氏ノ軍ヲ破リ
シモ正儀ノ畔キ去ルヤ正武ト共ニ河泉ノ軍ヲ擧行シ
義軍屢利ヲ失ヒ後龜山天皇ノ天野ヲ捐テ吉
野ニ入ラセラルヤ同族正督等亦畔キ去リシモ正高獨

内閣

リ屈セス正武與テ族義ニ殪レタル後モ尚義族ヲ糾
合シ天授四年攝河泉既ニ形勢ノ非ナルニ際シテ兵
ヲ紀伊ニ起シ足利氏ノ守將ヲ攻メ破リシモ大軍來リ
攻メタルヲ以テ逆戰ヲ利アラス其ノ引キ去ラテ復彼
ノ守將ヲ攻メ之ヲ淡路ニ走ラシメ泉州ニ入テ土丸城ニ據
リシモ大興來リ攻ムルニ遭フテ城ヲ捐テ後泉州高名
自遁ニ戰死ス

吉野朝祠官楠氏從將

故恩地 左近

楠正成、股肱宗徒、一人ニシテ河州恩地神社ノ祠官
ナリ。千劍破城ノ十七支城中、一タル恩地城、守將タ
リ正成始メ、後醍醐天皇ヲ召、應ニ笠置ノ宸
居ニ候セシ時之ニ、色從ミタル以來、櫻井驛訣別ノ時
ニ至ルマデ、常ニ隨從セリ。元弘ノ戰、赤坂城一タヒ北條
氏ノ軍ニ略セシタル際、糧米運搬ノ兵ニ假裝シテ
城ニ入り、守將ヲ降シテ之ヲ回復シタルハ、史乘ニ顯著

内

関

ナリ。正成、櫻井驛ニ到ルヤ、贈正四位和田正遠左近及
八尾顯幸等ノ宿將ニ戰死ノ意ヲ示シ、託スルニ正行
撫育ノ事ヲ以テス。後、天皇ノ花山院ニ遷御セラレシ時
足利氏守衛ノ事ヨリ、車加馬ヲ奪ヒ、顯幸等ト共ニ
ミテ吉野ニ奉シ、正行ヲ擁ヒテ行宮ヲ護セリ。

舊姫路藩家老職

故 河合 隼之助

諱ハ道臣舊姫路藩家老ヲ勤王ノ志士贈正四位河合屏山ハ其ノ美良嗣子ト爲ス文政ノ初年夙ニ其ノ別業ノ地ニ學問所ヲ設ケ當時ノ碩學ヲ聘シテ人才ノ美良成ニ勉メ美良嗣子屏山其ノ他勤王ノ志士ヲ輩出セシムルノ素地ヲ成セリ其ノ藩政弛廢シ公帑空窮之ニテ積債七十餘萬兩ニ及ヒタルニ際シ奉テ之カ革新整理ノ任ニ當リ萬難ヲ排シテ藩

内

關

費ノ節約ヲ斷行シ更ニ殖産興業ノ策ヲ盡シテテ國產ヲ振起シ晒木綿ノ製法ヲ改メ販賣方法ヲ新シテ販路領ノ開ケ生産忽チ激増シテ民力爲ニ充實シテ藩ノ財政亦之ニ相待リ整理ノ實ハ果ヲ収ム播磨地方ニ於ケル木綿織物ノ隆盛ヲ致サシムルノ基礎ハ其ノ力ニ依リテ鞏固ナルヲ得タリトシテ福セラル世以テ舊松江藩家老贈從五位朝日丹波ノ匹ト爲ス

舊丹波柏原藩顧問

故 小島 忠太

省齋ノ號ヲ以テ儒林ニ名アリ身ヲ煙草行商ニ起
シ人負實ニ處ニテ孝美良苦學ヲ屈セス經國子ニ
遂ク兵書ニ通シ治術ノ品タリ最爾タル丹波柏原
藩ニ重用セラレテ其ノ大才ヲ展フルニ至ラサリモ其ノ
尊王ヲ以テ一藩ヲ率ヒ藩政ヲ建テ學ヲ制ラ定メ
テ人才ヲ美良成シ藩政改革ノ端緒ヲ開キ藩ノ財
政ヲ救正ヘテ一旦緩急アル時ニ備フルノ餘力ヲ生セ

内閣

シテ美倉君ヲ封内各村ニ設ケシメ山歎ニ備ヘ明治ニ
年ノ不穀ニ際シ一藩動ク所ナカリシ如キ其ノ治績
殊ニ顯著ナルモアリ蛤御門ノ變ニハ藩主ニ從ヒ東京
都旁近ナル塚原ノ營ニ赴キ村ノ闕ヲ守護シテ王事ニ
勤メ封事ヲ朝廷ニ上リテ七卿及長藩主父子ノ譴ヲ
解キ國論ニ從ヒテ攘夷ヲ決行セシムコトヲ請ヒ時勢益
切迫シテ藩主以下御背ニ惑ヒ來テ去就ヲ問ハシムヤ
徳川氏ニ就クハ私情ニシテ天朝ニ屈スルハ公道ナリトハ
大義ヲ以テ答ヘ天朝若シ旗色振ハス車駕播遷
ノ事アルハ唐天竺ニテモ天子ノ御供仕ルヘント宣明シ

テ直ニ藩論ヲ一定セシメ伏見鳥羽ノ戰ニ際シテハ藩
主ノ朝命ヲ奉シテ塚原ヨリ直ニ禁闕ニ赴キ警備
ノ任ニ當リシ後事ヲ處理シテ塚原ハ營ヲ守リ尋
テ山陰道鎮撫總督西園寺公望ノ山陰ニ郷向ヲ藩
兵ノ薩長ニハ藩兵ト共ニ其ノ指麾モニ屈蜀シテ進發
シ山陰勤王ノ急先鋒トシテ重視セラレシモノ總ニ忠
太ノ深慮遠謀ニ出テサルナレ萬幸王ヲ首倡シテ藩論
ヲ一定シタルノ功ハ其ノ家塾ヲ開キテ藩學ヲ創シ文武
ノ人才ヲ輩出セシメテ進運ニ寄與シタルノ績ト共
ニ勲ス可キモノハ餘父辟玉トス可シ

内

閣

建武朝左衛門尉

故 宇佐 輔景

出雲國飯石郡三刀屋大田庄藤卷村地頭ナリ
其ノ居城ハ昔素盞鳴尊ハ股蟻ヲ鯨川上ニ斬
ラセラレ北クルヲ追フテ之ヲ誅セラレシ鯨川隄上ノ遺蹟地
ニ近ク合流スル三刀屋川ノ谿谷別ニ一區宣長ヲ成セル
中ニ在リ建武二年足利尊氏ノ鎌倉ヨリ據リテ叛シ新
田義貞ノ追討軍利アラスニテ師ヲ班ヘスヤ尊氏追蹙
シテ翌年將ニ京師ニ入ラントス輔景王師ニ屬シテ脇

内 閣

屋義助等ト共ニ山崎ニ拒キ利アラスニテ義助等ノ守
ヲおセツルヤ京師驚惶シテ乘輿叡山ニ幸セラル義
貞義助等扈從ニ輔景亦供奉ス尋テ尊氏ノ來
侵ニ際シ奮戦シテ功アリ左衛門尉ニ任シ西坂ヲ守ル
ヨリ尋テ義貞一タヒ京師ヲ復シテ又敗シモ源顯家楠
正成名和長年等諸將大舉シテ尊氏ヲ京師ニ討テ
洛ノ内外ニ劇戦シテ大ニ之ヲ破ル是ノ時長年西國ニ行
クリシヲ以テ輔景之ニ屬シテ伯耆名和黨ノ勇士ト共
ニ加茂七條一條桂等ノ諸積ニ奮戦シ進テ足利氏ノ
軍ヲ西山峯堂ニ驅テ之ヲ破ル尊氏敗シテ西走シ

33
延元元年東上し來ルヤ正成戰死シテ義貞亦敗レ京
師守ヲ失ヒテ車駕畧山ニ幸ス長年義貞ト共ニ
出テテ尊氏ヲ京師ニ攻メテ克タス諸將引キ還リシモ
長年獨リ存スルヲ恥チ自カラ走路ヲ絶チ弟信貞
等及ニ百人ト共ニ力闘シテ死ス輔景長年ニ屬セ
シヲ以テ此ノ戰ニ死シタルヲ疑ハ人皆其ノ長年ト共
ニ戰ヒ死シタルヲ傳フルハ正成ヲ得タリ

内

閣

故大高坂 松王丸

松王丸ハ土佐國大高坂郷ノ惣領ニシテ大高
坂城主ナリ延元興國ノ際南朝ニ屬シ
テ盡ニ瘁ス當時土佐ハ南風競ハス足利氏
ヲ援ケテ賊勢猖獗タリ官軍ハ大高坂
ヲ中心トシ僅ニ附近ノ小區域ニ過キス松王
丸忠憤熱誠燃ユルカ如ク孤城ニ據リテ
大義ヲ唱ヘタリ夫ヨリ頻ニ騎賊ト戦
ヒ軍士皆能ク命ヲ守リテ奮闘ス壯烈
ノ状實ニ感歎スヘシ興國元年正月
賊大舉シテ城ニ迫マルコト急ナリ官軍
來救ヒ屢ニ激戦セルモ遂ニ利アラズ
松王丸以下刀折レ矢盡キテ城門外ニ戦
死セリ

舊但馬豐田藩老

故 木下彌八郎

舊但馬豐田藩主京極高厚、老職タリ嘉加
永年間水戸ニ赴キ藤田彪人曾澤正志ニ學ビ又新
發流、砲術ヲ習ヒ夙ニ尊攘ノ説ヲ唱フ彪爲ニ魁
字ヲ書シテ旗印ト爲ス天保十四年父ノ後ヲ龍衣キ
テ藩ノ老職ト爲ルヤ水藩弘道館ノ學風ヲ主トシテ
藩校枕音古堂ヲ起シ一藩ノ士氣ヲ鼓振シテ朝
廷奉戴ノ藩論ヲ一決セシム贈正四位平野次郎

内

関

等三條實美卿ノ旨ヲ奉シテ義徒ヲ但馬ニ糾
合スルヤ陰ニ之ヲ秋實ニ表シ文久三年義徒ノ生野銀
山ニ率テ興テクルヤ水藩ハ之カ討伐ノ幕命ヲ受ケシモ
兵ヲ按シテ進フス義徒ヲシテ意ノ如クニ銀山ノ代官所
ヲ攻撃セシム不幸ニシテ義徒ノ敗ルヤ次郎等ヲ庇
護シテ之ヲ大井田服セシノ百方爲ニ便宜ヲ圖レリ乃チ果
テ水藩ニ及ホサムコトヲ慮レテ老職ヲ罷メ文武局總
裁トシテ教練ノ任ニ當ル一萬五千石ノ水藩ヲ以テシテ
明治維新ノ後國家有用ノ人材ヲ輩出スルコト等儕
ヲ後キタリシハ彌八郎尊王ノ大義ヲ本トシ教練

ヲ振起シタルノ賜ニ外ナラス明治三十八年 齡八十
ヲ以テ歿ス

内閣

京都進講儒士

故朝山 素心

應久長寛永ノ交惟ヲ京師ニ垂レテ諸生ニ教ヘ
親王攝關ノ門ニ出入シテ四書六經ヲ講シ一タヒ
駿河ノ徳川忠長ニ仕ヘモ諫言ノ納レラレサリモ
憤リ致仕シテ京師ニ歸ルニ承應心ノ初後光明天
皇素心ヲ引見セムトシ給ヒシモ應久安ノ變アリシ以來
幕府ノ處士ヲ監視スルコト嚴ナルヲ憚ラセラレ後水
尾上皇ノ御裁定ヲ經給ヒ諸家ニモ諮詢シ給ヒテ

内

閣

遂ニ聖意ヲ決セサセラレ素心ヲ召サセラル素心老顏
ヲ以テ固辭シタルモヨリテ意ヲ決シテ參内シ中庸ヲ
進講シテ睿感ヲ辱フレ爾來中庸並周易ヲ
進講スルコト屢次物ヲ賜フ天皇好學ノ御志深カ
リシト雖幕府拮据ノ爲進講ノ命ヲ奉スルサヘ意
ニ任カセス此ノ如キ時ニ方リ入テ中庸周易ノ如キ政道
ニ関スル所多キ書ヲ進講スルハ其ノ厄キコト後代ノ
夢想シ得サル所ナリ素心ノ敢正焉トシテ進講ノ命
ヲ奉シタルノ誠忠永ク後代ノ興亡者ヲ興起セシムルニ
足ル

38
舊丹後田邊藩執政

故 野田 希一

笛浦ノ號ヲ以テ儒林ノ重ヲ為セリ文政九年清國
ノ商船得業號駿河ノ清水港ニ漂着シ駿府代官
之ヲ長崎ニ護送スルニ際シ官差ニ應ジテ船ニ在リ筆
談シテ清客ヲ驚服セシメタルヨリ名聲耳海内ニ播キ
尋テ舊田邊藩主牧野氏ノ後擢スル所トナリテ遂
ニ執政ニ任セラレ總制ヲ兼メテ文教ヲ興メ海防ニ
備ヘラ碇置ヲ築ホキ一ハ藩文武ノ綱紀ヲ振ヘリ碇
術未ダ進フス諸ハ藩未ダ著キセサルモノ多キノ時
僻陬ナル田邊藩ニ於テ工事數年ニ亘リ堅固
ナル屋塲ヲ造リテ大碇大形三門小形六門ヲ備ヘ以
テ日本海ノ要津タル今ノ舞鶴ニ於ケル防備ヲ完
フシタルハ儒學ヲ研鑽シ文教ヲ振起シタルノ功
勞ヲミテ更ニ光輝マシムルモノト謂フ可シ

京都府士族

故 和田 義亮

贈正四位具木和泉守知銀山義興等與リ
ヲ成ラス伏見池田屋ノ變ニ僅ニ身ヲ以テ免カレ長
軍關ヲ犯ス際ニ其ノ天龍寺隊ニ屬シテ中立賣
鳥丸ニ激戦シ事敗レテ具木保臣ト天王山ニ別レ道
路ノ梗塞ヲ排シテ備中ニ出テ海路長州ニ航シテ小郡
ニ赴キ高杉晋作ニ下關ニ從ヒ幕府征長ノ役長軍
廣島口ノ遊撃軍地先隊長ト爲リ小瀬川ハ古之阪ニ

内

閣

營ニテ一齊砲撃能ク幕兵ヲ盡シテ初度ノ勝ヲ得
クルヲ以テ長藩主ヨリ感狀及賞金ヲ授ケル王政維
新ノ初太政官代ニテ監察ヲ命ゼレ車駕大阪ニ幸
セラルル際扈從スヨリ總督彰仁親王ノ軍ニ屬
シテ北越ニ赴キ官軍出羽ニ進入スル際ニハ福知山ノ
兵ヲ率キテ之ニ屬ス後兵部省官内省ニ仕ヘテ京都
府士族ヲ命ゼレ官國幣社ノ神職ニ補セラレモ晩年
仕途ヲ退キ京都西陣ニ在テ機業ニ從事セリ明治
二十二年十一月病ニテ歿ス年七十二

大阪懷德堂第一世總子主

故三宅新次郎

石菴ト號ス觀瀾ノ兄ナリ元禄ノ末惟ヲ大阪ニ墜レ
テ諸生ニ授ク懷德堂ノ創立者トシテ知ラルル中井
欽瓦庵ハ其ノ高弟タリ講場多松堂同禄ノ從大
ニ依リシヲ以テ欽瓦庵等同志ト謀リ懷德堂ヲ創
立セリ因テ仰クニ總子主ヲ以テシ其ノ總子全自カラ大阪ノ
一田兵衆ヲ放テリ陸王ヲ宗トシテ必ラスモ程朱ヲ去業
テスニ實修ヲ主トシ市井ノ子弟ニ近キヲ平易ヲ

内閣

誘掖セリ享保ノ當時大阪ノ文教風ニハ蔚然タルモケ
リシ其ノ薫化ニ負フ所最モ大ナリ其ノ浪華ニ教
授スルコト前後ノ諸賢ニ比シテ最モ久シク實ニ三十餘
年ニ及ヘル以テ其ノ諄諄不倦マサルノ德ヲ觀ル可シ

大阪懷德堂學問所助教

故 五井 藤九郎

蘭洲ノ號ヲ以テ知ラル所ニ朱子ヲ宗トシ常ニ四書ヲ講
セシ四書屋加助持軒ノ第二子タリ客遊苦修シテ
家傳子ヲ繼キ百子保九年持軒ノ門人中井秋庵等
同志ノ懷德堂ヲ創立シニ宅石菴ヲ聘シテ學子主
ト為スヤ其ノ學問所ヲ開ク際シ衆ノ推ス所ト為リテ其
ノ助教ト為ル一タニ津輕ノ侯ニ聘セシモ其ノ致仕
シテ大阪ニ歸リ再ヒ推サレテ懷德堂ノ助教タリ徒ニ

内 閣

授クルト二十年學子規ヲ振作シ經學ノ外更ニ詩文
ヲ加ヘ學子益々為ニ一變セリ其ノ旋テ改メテ町内有志ノ
隨意聽講ヲ許シタルハ殊ニ大阪ノ文教ヲ興スニ與
テ力アリシカ如シ其ノ陸王學子ノ弊ヲ禪ハ壯ナリトシ仁
齋學子ノ弊ヲ功利ナリトシ徂徠學子ノ弊ヲ放蕩浮躁
ナリトシ闇齋學子ノ弊ヲ刻薄寡恩ナリトシ聖賢
ノ遺訓已ニ切ナルヲ以テ心術德行ノ基ト為スヘキヲ唱ヘ
復古學子盛ニ行ハルノ際ニ在リ獨立シテ程朱ノ學統
ヲ宣明シタルハ文教ニ資スル所殊ニ大ナルモノアリ大阪
學子教ノ基礎ヲ定メタルノ功録スルニ足ルモノ多シ

大阪懷德堂教授

故 並河 復一

寒泉ノ號ヲ以テ知ラル帝陵實査ハ其ノ功勞ノ
最モ大ナルモノナリ懷德堂教授中井碩果ノ嗣子ト爲
リ後原姓ニ復セリ碩果歿スルニ及ビテ教授ノ職ヲ繼
ギ以テ廢校ノ日ニ至ル迄政元年曾西亞軍艦ノ大
阪灣ヲ突入シ際ニ東西兩奉行ノ囑ヲ受ケ中井桐園
共ニ日々曾艦ニ接近シ漢文ノ應對ヲ爲シ追従シテ
加多ニ抵リ命ヲ終ヘテ歸ル翌年京都所司代ヨリ反正

内

閣

仁賢後村上ニ廻山ノ四陵調査ヲ囑セラレ出テ河内
ノ山陵ヲ巡拜シ翌年東奉行ヨリ命アリ河内ノ帝陵中
仲良允恭仁賢後村上ノ四陵ヲ考證シ圖式ヲ添ヘ
テ提出セシメ因テ諸陵ニ詣リ親シク調査ヲ遂ケタリ
明治二年懷德堂ヲ開ケタル以後依然トシテ惟テ大
阪近郷ニ重テテ教授シ後大阪ニ還リテ歿ス

舊播州赤穂藩參政

故 村上 真輔

舊河赤穂藩主森氏ノ參政タリ實貝母片山氏曾ニ
有栖川宮ニ仕ヘ叔母亦御乳人トシテ宮中ニ奉仕シタル
コトアリ故ヲ以テ夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ從弟ノ廣島司家ニ
侍殿南タル者ヲシテ常ニ京都志士ノ實狀ヲ報セシメ後
長子直内ヲ藩ノ周旋方ニ薦メテ京都ニ居ラシメ二男
河原駱之助ヲシテ大阪ニ居ラシメ藩ノ財務ニ當ルニ志
京畿ノ形勢ヲ報セシメ多端ノ間ニ度々シテ更ニ其ノ世

内閣

タル舊岡山藩士贈正五位江見銳馬ト氣脈ヲ通シニ
萬石ノ小藩ヲ以テ岡山藩ト步調ヲ俱ミシメテ勤王ノ
興ヲ出テムルセリ文久ノ初年形勢ノ急迫シテ詭譎
ノ徒往往輕舉ヲ出テムルニ具輔之ヲ制シ泰然トシ
テ勤カス為ニ急激流ノ為政ニ抗スル者アルヲ致シ其ノ
要點ナル所ト為リテ斃死ル然レモ其子其ノ一族皆
心ヲ戮セテ王事ニ勤メタルヲ觀ルニ一藩ヲ率キテ
當時尊攘ノ論議鼎沸シ朝野騷然タル間
ニ度々藩論ノ歸嚮ヲ誤ラシメス一ニ勤王ノ大義
ニ伏シシメタル孤忠苦心最モ多クスヘキモノアリ

播磨國加古川上流水路漁場開設金考

故 阿江與助

文禄年間越豆臣秀吉、姫路ニ在城セシ當時ヲ以テ
現今加古川ノ上流瀧野川ノ河床ヲ成セル巨巖散開
數金ヲ出願シ允許ヲ得テ鉅額ノ私財ヲ投シエテ起
シテ數箇所ノ巖石ヲ開鑿金シ難瀬ヲ浚深緩
和シ以テ舟筏ヲ通スルコトヲ得シ上ニ丹播兩州ノ初
貨堆塞セルヲ疏通シ下ニ高砂港ノ門戶ニ連結シ
タル水運ノ利便ヲ開ケリ瀧野川ノ上流更ニ田高川
ノ巖石多ク舟行ニ難キアリ因テ慶長九年當時ノ
姫路城主ヨリ命ヲ受ケ之カ開鑿金ノエヲ起セリ巖散ヲ
鑿リ難ヲ深ヘ端上ニ舗板ヲ用ヒテ舟筏ヲ通セシメ工
竣成ヲ告ケテ茲ニ始メテ源流地田高村ヨリ高砂港
ニ至ル約十二里ノ漕運ヲ大成セリ點漁ノ名勝地タ
ル瀧野ノ關龍瀬モ亦巖石開鑿金ノエヲ加ヘテ漁
場ヲ形成シタルヲ以テ更ニ一流ノ漁法ヲ創始シ以テ
全國ニ此類ナキ無制限漁區トシテ點漁ノ免許ヲ得
タル漁業組合ノ今日アルヲ致サレタリ晚年平野新
田ノ開發發ヲ止テ里ノ嗣子事ニ當テ五十餘町ノ耕地ヲ開ケリ

内 閣

江戸在住國學者

故 鈴木 重胤

淡路ノ人家也。仁井村ノ里正タリ贈従四位大國
隆正ノ門ニ學ヒ贈正四位平田篤胤ノ秋田ニ在ルヲ
訪ハムトシテ之ニ赴ク其ノ歿後五十日ナリシヲ以テ逢ハ
ス意ヲ舊書ノ採訪ト古蹟ノ踏査トニ致シ足跡
海内ニ遍ネリ其ノ著日本書紀傳百四十七卷ト
延喜式祝詞講義二十四冊ト白皇典及古代史ノ研
究者ニ重視セラル其ノ倭子敬神ヲ以テ經ト爲シ

内閣

尊白王ヲ以テ緯ト爲シ是ヲ以テ門人ヲ砥礪セリ
故ニ幕吏ノ忌諱スル所トナル久三年將軍家
茂ノ上洛セムトスルニ方リ志士京師ニ雲集シ之ヲ擁
シテ攘夷ノ實ヲ興テケムトスルヤ京都守護職松平
容保刺客ヲ放テテ幕府ニ抗スル徒ヲ糾彈ス
重胤亦是ノ時京師ニ在テ贈従四位鐵石藤本津
之助贈正五位松浦八郎等ト來往ス身漸ク危キヲ
知り去テ大和ヲ巡視シ江戸ニ歸ル是ノ歲八月黃
昏賊アリ給キテ重胤ヲ刀外ニ出テシメ之ヲ龍衣ヒテ
重傷ヲ負ハシム重胤之ニ死ス

若州小濱真宗妙玄寺住職

故東條義門

皇國語學ノ研鑽ニ専心從事スルコト四十有餘年
著述二十餘種ニ及ヒ其ノ考覈綿密ニシテ公平其
ノ商榷亦靜妥ニシテ的確トシテ國語學ニ於ケル貴重
ノ典據タルニ値ヒセサルナシ其ノ學ヲ本居宣長及其ノ
子春庭ノ著書ニ基クテ雖古典舊記ヲ悉ク精讀
透察シタルノ識力眼孔前後ニ比ス可キモノナリトシテ稱
セラル其ノ能ク前人未發ノ玄ヲ鉤シ幽ヲ闡シ遂ニ

内 閣

現今世ニ行ハル活語上ノ五轉ヲ考定シ文政六年
其ノ説ヲ載セタル友鏡ノ一書ヲ刊行セタル國語學ノ
新紀元ヲ開キシモノナリトシテ重視セラル語辭活用ニ於
ケル五轉ノ形式ト名稱ハ現今廣ク行ハル所ニ屬ス其ノ
他動詞形容詞ニ就テモ新ナル研究ヲ大成シ日本史典ノ
内容為ニ始メニ整正齊完備ヲ告ケタリ更ニ進ミテハ契
沖宣長ノ誤謬ヲ訂シ音韻學ノ正脈ヲ明シ佛典ニ
至ルマデ其ノ學説ヲ大用シテ縱橫無碍ノ概アリ一々國語
學上ノ解説ヲ施シテ廣ク細流ノ眼釘ヲ拔キ始メ
斯學ノ原野ニ逢著セシメタルハ我邦文運ノ一新生

面ヲ開カシメタルモ、トス居常ハ樂不餌ニ親ムノ廷弱ヲ
以テシテ一意皇國語學ノ完成ト宣傳ト努力シ之
カ為篤疾ヲ備中ノ霸旅ニ獲テ歸リ貞敬親王ノ
下囑命ニ係ル程此程ノ緒ノ病牀ニ作進シ數日ミ
テ示寂セリ其ノ天和年中歎凶ニ遭ヒ寒素不僮ニ支
フル身ヲ以テ饘粥ヲ施與シ餓者ヲ恤ムコト二年ニ及ヒ
シ如キ亦以テ仁慈ノ徳ニ深カリシヲ觀ルヘシ歟スル年
ハ天保十四年ニ在リ總テ其ノ功本居春徳ノ上ニ在
リ贈正四位契沖ノ後勳ナリトシセニ定論アリ

内

閣

舊福井藩歌人

故 井手 曙覽

勤王歌人トシテ重セラル橋曙覽、名幕末志士、
舊福井藩ニ出テ其感ヲ激勵ニ由ラセ
ナシ其ノ名臣ノ哀ヲ以テ高估ノ家ニ出ラシモ卓然
トシテ任スルニ處シテ以テ藩主、招陳ヲ受ケル雖辭
シテ城中ニ赴カス藩主松平春嶽親ラ其ノ草廬
ヲ訪ヒ藩老中根雪江等ハ日夕往復シテ尊王ノ大
義ヲ論シ皇室ノ式微ヲ慨セリ志ヲ歌詞文ハ深ニ注

内

閣

キト雖其ノ皇國古學ヲ以テ自任自負ノ旗幟ト爲シ
其ノ塵外ニ超然トシテ聞達ヲ求メス威武ニ阿ヘラズ以
テ士風ノ儀範ト爲リ歌道ノ精華ヲ傳ヘ一藩ノ主
臣士庶ヲシテ振起スル所ヲ知シテ藩主及老臣ヲシテ
諸ハ藩ニ率先シ進テ維新ノ皇猷ヲ羽翼スルニ
ルミ力アリシハ其ノ交遊知遇ノ間ニ祐育ヘ其ノ歌詠
應酬ノ中ニ徴スルモ歴然トシテ指證スルニ足ル

舊鳥取藩所屬農兵隊長

故松南六郎兵衛

松南隊と稱せられたる舊鳥取藩所屬農兵隊長
五十人ヲ統率シ私財ヲ投シテ銃具、資具、訓練費
ヲ辦シ安政二年ヨリ明治元年ニ至ルマデ約十五箇年
ニ亘リ別ニ淀江砲臺防禦、爲藩費ヲ以テ編成セル
防禦隊九十六人、總指揮長タルト文久三年ヨリ
慶應三年ニ至ルマデ約五箇年殊ニ曲辰兵隊ノ用ヒ
シハ新式ノ線入銃ニシテゲバール銃と稱シ明治元年奥

内閣

羽ノ戦ニ参加シテ秋田口ノ官軍ニ先鋒トナリ北壯内口
本道タル羽州境村ノ戦闘ニ奮撃シタル際、如キ
ハ兵器ノ精良ヲ以テ能ク驍名ヲ博セリ腹背ニ敵
ヲ受ケ古戦シテ隊員死傷多ク身亦重創ヲ負
ヒシモ佐土原藩兵ノ來援ニ會レ奮戦シテ壯内藩
兵ヲ破リ功ヲ以テ賞典録ニ百石ヲ賜ハル翌年歉
凶ニ遭ヒ居村及近郷ノ里正ヲ會シテ當年ノ小作
米一切ヲ免スルコトシ鳥取藩兵ノ小隊長ヲ辭シテ
ヨリハ家居シテ東京ニ移住ス伯耆國今津村大
庄屋ハ藩ノ金融役ニ身ヲ起シ終世國事ニ盡瘁セリ

元弘朝美作義徒

故植月重佐

贈従四位有元佐弘贈従四位有元佐光贈正五位
有元佐吉等ト共ニ作州官家一族黨ニ屬
ス元弘ノ朝車加馬隱岐ヨリ伯耆ノ船上山ニ遷
幸アラセラルルニ方リ佐弘佐光佐吉及福光佐長
原田佐秀應爲取種佐等ト馳セテ行在ニ赴キ守
衛ノ任ニ當レリヨ守テ六波羅追討ノ軍ニ參加シテ
攝津ヨリ進ミ官家ノ族黨黒三百餘騎赤松圓
心ノ軍ニ先鋒トシテ京都四條ノ猪熊ニ攻メ入り六波
羅ノ將武田兵庫助等一千餘騎ト會戰シテ官
家ノ援ナク衆寡方敵セズ遂ニ敗績シテ佐弘等ト
共ニ忠死ヲ遂ケタリ

元弘朝美作義徒

故 鷹取種佐

贈従四位有元佐弘贈従四位有元佐光贈正五位有
元佐吉等ト共ニ作州官家ノ一黨ニ屬ス元弘ノ
朝車加馬隱岐ヨリ伯耆ノ船上山ニ遷幸アラセラル
ルニ方リ佐弘佐光佐吉及福光佐長植月重佐原
田佐永乃鷹取種佐等ノ馳ヒテ行在ニ赴キ守衛ニ任
ニ當リシト史乘ニ明カラヨリテ六波羅追討ノ軍ニ參
加シテ攝津ヨリ進ミ官家ノ族黨三百餘騎赤松
圓心ノ軍ニ先鋒トシテ京都猪熊ニ攻メ入り六波羅
ノ將武田兵庫助等一千餘騎ト會戦シテ苦闘援
ナク衆寡劣敵セテ遂ニ敗績シテ佐弘等ト共ニ忠死
ヲ遂ヘタリ

備中鴨方欽塾主

故 西山 拙齋

郷里備中鴨方、欽塾ヲ開テ宋學ヲ倡ヘ時弊
徂徠學ニ靡キテ文辭ノ末ニ馳スルヲ慨シ友人贈從
四位此木野成助ニ書テ寄セテ偽學ヲ禁セムコトヲ勸ム
寛政異國學ノ禁拙齋其ノ先倡タリ光格天皇高祿
ヲ以テ徴シ得サルコトヲ歎セラル拙齋聞テ感泣ス後年松平
定信苗裔府ニ薦ノ加賀阿波大洲ノ諸侯之ヲ聘セシメ
赤輔頼春水頼杏坪世官茶山等、勸告アリシモ峻拒

内閣

シテ應セヌ其ノ學大義名分ヲ明ニシ綱常ヲ扶持ス
ルヲ以テ主ト爲ヌ其ノ王ヲ尊ヒニ覇ヲ争クルノ精神峻
烈ニシテ峭峻ナルモノヤリ北條泰時ノ義時ヲ諫ノカリシ
ヲ糾彈シテ平重盛清成等ヲ諫ノタルヲ爲ニ倣ヒ得ザリシヲ
斯ニテ之ヲ叛逆ノ臣トナシタル如キ其ノ及門諸子及亦モ
ニ感心化シテ大ナリシヲ推スニ是ル人材其ノ門ニ出テレハ之ヲ
待タス

舊作州津山藩老

故 長尾 隼人

名、勝明、舊津山藩主、木村長成、老臣トシテ四千石ヲ領ス先セ、幕政ヲ整厘、革シ堤防ヲ修メ溝渠ヲ疏シテ水利ヲ興シ租ヲ薄クシテ富ヲ興メ治績興テリ德川光圀、樟公碑ヲ湊川ニ建ツルニ先ツコト四年、夙ニ貞享五年ヲ以テ藩主ニ請ヒ兒島高德ノ遺蹟地タル院庄行在、舊址ニ櫻樹ヲ植ヘ碑石ヲ建テ吉野朝忠臣表彰ノ第一鞭ヲ於セリ

内閣

其、碑銘ニ於テ自皇帝赫怒セシレ、爲加馬西ニ翔ラセタマヒシニ天ハ神聖ヲ羽翼ケテ之ニ賢良ヲ降シ片言櫻、誌シテ百世ハ方ヲ流シ今ヲ明ミシテ賊ヲ討テ忠ヲ聲正クシテ王ニ勤ム我氣石ニ刻ス烈日嚴霜ト、語ヲ鐫刻セリ是レ明ニ尊テ王ヲ霸、大義ヲ闡揚セシモノト謂フ可シ後元禄二年ヨリ作陽誌、編纂奈ニ著手セシノ二年、年ノ歳月ヲ具シテ作州西部六郡八冊ノ稿ヲ脱セシタリ美作唯一ノ古書トシテ地理歴史研敷ノ資料ニ供セラル作州舊記古文書、保存史蹟名勝ノ擁護皆其ノ深謀ニ出ツ

故 植田 乙次郎

右乙次郎、舊廣島藩士ナリ藩政ニ勤メ
用達所頭取ト爲リ勘定奉行ヲ兼ヌ嘉
永癸丑米艦渡來ノ後々尊攘ノ議盛
ナルニ當リ同志寺尾小八郎等ト謀リ
執政ニ説キ盡クス所尠カラス文久中
藩主ヲ輔ケ日夜勤王ノ事ニ周旋セリ
元治慶應ノ際四海紛擾時勢日ニ迫
ル外夷内海ヲ犯シ幕府長藩ト兵ヲ
交ヘ天下ノ窮苦尤モ甚シキニ當リ乙

内閣

次郎藩命ヲ承ケ身ヲ挺テ朝幕長
薩ノ間ニ奔走シ言聽カレ策用井ラレ
竟ニ薩長藝三藩同盟上京ノ舉ヲ決
議スルニ至ル明治戊辰正月鳥羽伏見ノ
戦起ルヤ乙次郎敵状ヲ偵察シテ能ク
官軍ノ攻撃ヲ利スル所ノ功多カリシ
當時善ク藝三藩勤王ノ業ヲ助ケタ
ルモノト謂フヘシ

故寺尾 小八郎

右小八郎ハ舊廣島藩士ナリ 初メ生十郎
ト稱ス 勘定所吟味役ニ用達所詰ト
爲リ執政ノ下ニ屬シテ盡瘁ス爾來
天下ノ時勢頗ル窮迫ノ状ニ陷ルヤ同志
植田乙次郎ト相謀リ專ラ機務ニ參
シ藩主ヲ輔ケテ善ク難局ニ處ス嘉
永文久ノ間日夜乙次郎ト提携乃シテ四
方ニ奔走ス慶應二年再ヒ征長ノ議起
ルニ當リ切ニ名義ノ正シカラサルヲ論シ藩主

内

閣

之カタメニ從軍ヲ辭スニ至ル爾來小八郎
銳意以テ王政復古ノ事ニ周旋シテ思ハス
維新後ニ至リ專ラ殖産興業ニ務メ士族
授産ノタメニ盡力ス後々宇品築港ノ事
起ルヤ善ク漁民ノ紛議ヲ解キ暴行ヲ
諭シ且ツ築港工費^助成ノ策ヲ設ケ
此契手ヲシテ完成ノ易キヲ致サシメタルハ
小八郎ノ功勞與テ力アリト謂フヘシ

故山岡八十郎

左八十郎ハ舊福山藩士ニシテ人ト爲リ
懇心石子忠孝ノ志深ク父死シテ三年ノ喪
ニ服ス夙ニ政務ニ任シ清職ニ累進セリ嘉
永癸丑米使ノ來テ國書ヲ呈スルヤ幕府
措置ヲ謬リ時論紛擾志士悲憤シテ起
ントス藩主阿部正弘宛モ閣老ノ職ニア
リシカ斡旋ノ効果ナキニ依リ八十郎更
ニ面謁ヲ乞ヒ切諫セント欲セルモ時ニ頭瘡
ヲ患ヒテ志ヲ達スル能ハス八十郎曰ク生
キテ直諫ノ後ル、ヨリハ寧ろ死シテ遺表
ヲ上リ速ニ英斷ヲ促スニ若カスト遂ニ屠
腹シテ死ス實ニ安政元年八月二十四日
ナリ其ノ忠節勲勞洵ニ賞スヘキモノ
トス

故石井末忠

右末忠、安藝國安藝郡府中村ノ人ナリ
元弘三年後醍醐天皇ノ隠岐國ヨリ還
幸アリ六波羅標題討伐ノタメ更ニ給旨
ヲ賜ヒ諸國ノ義兵ヲ募ラセラル、ヤ山
陽山陰四國九州ノ豪族ヨリ馳セテ錦旗
ノ下ニ集ルモノ多シ此時末忠安藝云ノ
軍兵ヲ率井テ千種忠顯ノ部下ニ屬シ
六波羅討伐ノ功アリ後チ湊川ノ戦役ニ
赴キ楠正成戦歿ノ際同リ奮闘シテ
忠死セリ壯烈ノ功績偉ナリト謂フヘシ

内

閣

故 華岡 震

右震、紀州那賀郡名手村ノ人ナリ
夙ニ祖業ヲ繼テ醫術ニ志シ内科ヲ吉益
南涯ニ外科ヲ大和見水ニ學ブ夫ヨリ刻苦
効勵廣ク名家ノ諸説ヲ参酌シ外科施
術ニ於テ幾種ノ新療法ヲ發明シテ華
岡流ノ一派ヲ開ケリ而シテ手術ヲ行フニ
當リ麻醉劑ヲ使セシハ實ニ西洋人ノ發
明ニ先ツモノ數十年前ノ創意ナリト
云フ又永富獨嘯庵ノ著書ニ乳岩治術
ノコトヲ記スルヲ讀ム自カラ研究ノ餘遂ニ
療法ヲ案出シ其ノ精妙ヲ得ルニ至レリ
爾來震ノ聲譽日ニ盛ニシテ病者四方
ヨリ集リ門前常に市ヲ為ス震特ニ慈
善ノ志厚ク好テ貧病者ヲ恤ミ隣里洵
ニ其ノ惠澤ニ浴スルモノ多カリキ

故多田 宗太郎

宗太郎、高波國勝浦郡小松島町金磯、
人ナリ。文政七年十一月二十八日ヲ以テ生ル
。稟性貞家邁ニシテ深ク國家的思想ヲ抱
ク。安政以降攘夷論ノ盛ナルニ當リ宗
太郎大ニ外夷ノ暴慢ヲ憤リ私費ヲ投シテ
砲臺ヲ築キ大砲及ヒ附屬具ヲ添ヘテ藩
主ニ獻納ス。又祖業ヲ繼キ金磯一帯ノ海
濱ヲ埋立テ防潮林ヲ作り用水路ヲ鑿金
チテ一大耕地ヲ築成セリ。其ノ公共工事
業ヲ起スニ當リ率先シテ之ヲ督勵セ
リ。仍テ屢々官府ノ褒賞ヲ受ク。且ツ
常ニ慈善ノ志ニ富ミ善ク貧困者ヲ恤
濟セリ。其ノ公共ニ竭セル功勞頗ル顯著
ナリトス。

故土肥 大作

大作ハ讃岐丸亀ノ人ナリ天保八年九月二日ヲ
以テ生ル資性潤達ニシテ氣節アリ長シテ
學ヲ好ミ諸方ニ往キ名家ノ門ニ研學
シ科業大ニ進ム安政以降深ク國事ヲ
憂ヒ當世ノ有志ト結ヒ四方ニ奔走シテ
日夜勤王ノ事ニ盡クセリ慶應二年幕
遣ニ依リ幽閉セラレシカ明治元年王政
維新ニ會シ幽閉ヲ釋カル又大藩ノ力

内閣

ヲ藉リ國嗣ヲ迎ヘテ社稷ヲ保ツノ非ナルヲ
切論シ遂ニ其ノ擧ヲ止メタルカ如キハ
精忠ノ精神寔ニ敬服スルニ足ル翌二年
徴士ニ薦メラレ又丸龜藩權大參事ト為
ル三年公議人トシテ東京ニ赴ク四年民部
省出仕及ヒ大藏省出仕ニ補シ尋テ飾
磨縣參事ニ任セラル五年新治縣參事
ニ轉シ治績アリシモ深ク難治ヲ憂慮シ一夜
厲腹シテ死ス寔ニ惜ムヘシ

故太田次郎

次郎、讃岐國三木郡田中村ノ人ニシテ天保九年閏四月八日生ル父ハ醫道ヲ以テ業トス次郎夙ニ製藥究理及火術ヲ修ム又飯間八郎、電氣火術ヲ學ヒ小橋安藏、漢學ヲ受ク安政以來頻ニ勤王ノ志士ト結ビ日夜國事ニ奔走ス文久中等攘ノ説大ニ進ミテ大和行幸ノ議發セラルモテ七公卿西竄セリ元治甲子

内

開

京都ニ於テ六月五日七月十九日ノ變アリ此ノ時次郎同志ヲ率井テ四方ニ奔走ス慶應中時勢ノ切迫ニ際シ周旋尤モ務ム明治元年正月鳥羽伏見ノ戰起ルヤ志士獄ヲ出ツ次郎力ヲ竭シテ松崎澀右衛門ヲ獄ヨリ救放セリ翌歲續年ノ功勞ニ依リ高松藩厚ク之ヲ褒賞ス後チ歸村シテ民法ニ力メ産業ヲ勵メシテ國家ニ報ヒタリ屢々危難ヲ冒シテ國事ニ盡シクセル所ノ功績洵ニ嘉尚スヘシ

故村上 義弘

義弘ハ元弘中六波羅討伐ノ給旨ヲ奉
シテ義兵ヲ起シ海軍ヲ以テ土居得能諸
氏ト力ヲ協セ瀬戸内海ニ於テ北條時直
ノ戦艦ヲ悉ク撃破セリヨリテ京師ニ入リ
皇軍ヲ援ケテ大ニ六波羅兵ト戦ヒ功ヲ
奏ス其ノ忠勤義績洵ニ顯著ナリトス

内

閣

故松根 圖書

圖書ハ宇和島藩ノ老臣ニシテ經濟事務
ノ才幹ニ長ス藩主夙々心ヲ勤王ニ傾ケ
國事ニ忙シクシテ殆ト費途ニ堪ヘサリシカ
ハ圖書是ニ於テ物產ヲ製造輸出シテ
民力ヲ養ヒ札銀引替ノ準備ヲ充實
シテ善ク財務ヲ整理セリ更ニ農事ヲ
重シ井堰ヲ修築シテ汎濫ヲ防キ河線
ヲ變更シテ灌漑ヲ便ニセリ或ハ長崎ニ往
來シテ文化ノ輸入ヲ謀リ或ハ天下ノ名士
ヲ庇護シテ學藝ヲ進メ加之後進ノ有
志ヲ率井テ維新ノ鴻業ヲ翊賛セル所
ノ功績洵ニ顯著トス

内閣

故松浦 宗案

宗案ハ永正年間伊豫國北宇和郡
三間村ニ生ル大森ノ城主土居氏ニ仕
ヘテ重臣タリ常ニ機務ニ參シ武事ノ
餘深ク心ヲ農桑ニ用ユ戰國爭亂ノ
時ト雖モ決シテ衣食ノ本源タル農業ヲ
忘レス十八九歳ヨリ諸國ヲ遍歴シ老農
碩學ニ就キテ研修セルモノ多シ永禄中
城主大ニ農事ヲ勸奨スルニ當リ宗案
顧問ト爲リ多年ノ實驗ヲ以テ蓄積
セル農藝上ノ知識ヲ與フテ貢獻シ領
内ノ農況大ニ進ニ效果ヲ見ンモノ夥多
ナリト謂フ其ノ主土居清良トノ農事問
答ハ土居清良記ト稱スル寫本ナルカ其ノ内
特ニ農談ニ係ルモノヲ親民鑑月集ト
名ツケテ後世ニ傳フ佐藤信淵之ヲ得
テ激賞已マサリキ其ノ内容ハ寒ニ水撰
薄時法其ノ他往々創聞ニ屬スルモノ
多シ彼ノ農學者者宮崎安貞ノ農業

全書：先タツコト百三十餘年前ナリ
宗案カ此ノ道ニ於ケル先見卓識洵
ニ敬服スヘシ

内

閣

故足立 重信

重信ハ半右衛門ト稱ス伊豫國松山城主
加藤嘉明ノ重臣ナリ文禄中擢ラレテ
内政ヲ司リ又慶長ノ外征ニ從軍シテ功
アリ松前城ヲ修メ松山城ヲ築ホク又伊
豫川ノ水ヲ治メ石手川ヲ改修シテ灌
漑ノ便ヲ開キ以テ農産ノ利益ヲ増殖
シ城下ノ殷賑ヲ極ムルニ到レルモノ
畢竟重信ノ恩惠ニアラサルナシ

内

閣

故谷重遠

重遠、丹三郎ト稱シ秦山ト號ス聰敏
識高ク學殖最モ富ム廣ク神儒佛
ノ典籍ニ精通シ深ク天文曆算ノ諸學
ヲ研究ス子弟ヲ教正テ國體ヲ説キ著
述ニ盡瘁シテ名分ヲ正ス遂ニ南學子ノ
一派ヲ以テ後世ノ勤王思想ヲ發揮ス
ルヲ得タリ

内閣

故長岡 恂

恂ハ諱ヲ教美ト云ヒ懷山ト號ス舊
高知藩士ナリ英氣敏才ニシテ和漢洋
ノ學ニ通シ詩文ヲ善クス夙ニ勤王ノ志
ヲ抱キ有志ト交リ文久以降日夜國事
ニ幹旋ス阪本龍馬ノ海援隊ヲ組織
スルヤ其ノ同盟ニ加ハリ專ラ文書ノ
事ヲ司ル維新ノ際龍馬ノ後ハ藤象
次郎ニ交付セシ八策ノ如キハ恂ノ執
筆ニ成レリト云フ

内閣

故伊藤 和兒

和兒ハ善平ト稱ス舊高知藩ノ豪
商ニシテ文化十二年某月日ヲ以テ生
ル稟性篤實廣ク和漢ノ學ヲ修メ
武藝諸道ニ精熟セリ多ク子弟ヲ
教養シテ國事ニ酬ユ所アラントス
嘉永以降深ク勤王ニ心ヲ傾ケ有志ト
結ビ私財ヲ擲キテ日夜時務ニ貢獻
ス其ノ功績洵ニ顯著ナリトス

内

閣

山城國綴喜郡中和東村田村新田

開發者 故 田村 清兵衛

元禄年間禁裏衣御料地タル和東郷、大庄屋大年
高トシテ深々白土室歳入、復々ナリタル、慨キ郷内遺地
多キヲ見テ新田開發ヲ出願シ公許ヲ得テ其ノ工ヲ起シ
山ヲ開キ水ヲ引キ山間ニ耕地拾壹町五反餘ヲ開拓シ
部民ヲ移シテ一村ヲ立テ之ヲ田村新田ト名ケ貢米ヲ獻
テ禁裏衣歳入ノ穴窮セセル當時能ク御料收入ノ増加ヲ
見ルニ至ラシメタリ地積大ナリヌ收納鉅ナリヌト雖其ノ
内帑ヲ補足シタルノ功少シトモ其ノ皇室ヲ尊奉崇
シ式微ヲ慨シタルノ忠忱發シテ此ノ開墾ト為ル清
兵衛指拮ノ功亦以テ勤王ノ一努力ニ匹ス可シ

丹後縮緬ノ始祖賴屋佐平治事

故 木林田治良兵衛

丹後地有織物衰運傾クヲ憂ヘ専心時好ニ適シタル織物ヲ索出セムトシ研設數年寢食ヲ忘レテ未タ之ヲ得ス遂ニ意ヲ決シテ京都西陣ニ抵リ機業ノ家ニ就テ織法ヲ習ハムトシタルモ他所ノ人ナルヲ以テ容易ニ傳ヘス因テ他意ナキヲ示サムカ為其ノ家ニ養子トアリ刻苦シテ漸ク秘法ヲ得タリ乃テ郷ニ歸リテ其ノ業ヲ起サスルヤ西陣ノ機業家ハ其ノ違約ヲ責メテ訴訟ニ及ヒ三年

内 閣

ニ及リテ事漸ク解タリト雖之カ為ニ資産蕩盡シ殆ト死ニ迫ル然レトモ勇カテ鼓シテ屈セス將ニ縮緬ノ織法ヲ試シムトスルニ綜絲ノ術未タ完キヲ得ス力殫テ神心懃懃中ニ在リシニ適郷人ノ來テ資金を惠與スル者アリ因テ奮勵シテ機業ノ各地ヲ巡行示レ事ヲ綜絲ノ術ヲ考究シ遂ニ完全ナル縮緬ヲ創製シテ之ヲ公ニスルコトヲ得タリ寔見シキヲ保五年三月ノ事ニ屬ス其ノ織法爾來丹後地ニ傳播シ一大初産タルヲ致セリ今丹後峯山町宇治原ニ治良兵衛ノ紀念碑ヲリ機業ノ家皆仰テ丹後縮緬ノ始祖ト為ス

京都府丹後國與謝郡岩瀧村生絲

縮緬販賣業者故真名并純一

安政萬延、交郷人ノ日本海ニ航運ヲ開ケルヲ機ニシテ
海路屢奥羽ニ往來シ縮緬ノ原料ヲ輸入シテ丹後地
方ノ機業者ニミテ供給シ其ノ制衣品亦搬入其ノ手ニ依リテ
諸方ニ販路ヲ得其家號山家屋ノ名聲遠近ニ播リ
阿曾海ノ埋立工事ヲ起シ男山海邊、新田九千坪ヲ開
キ横濱、ハ生絲輸出ノ盛況ヲ目撃シ米澤ニ制衣絲
ノ方法ヲ視察シエセテ雇聘シテ制衣絲ノ傳習自ラ始メ

内

開

替蠶種ヲ羽前ヨリ購入シテ郡内ノ各村ニ分與シ桑木樹
ノ改良ヲ進言シ桑園ノ開拓ニ從事シ奥州ヨリ晒蠶
ノ原料タル漆櫨ノ苗木ヲ購入ハ試植切ヲ奏セス山城ハ曙
ノ綿花ヲ賣買會社ハ兵燹火ニ罹リシモ屈セズ明治ノ初
ハ徳島ハ藩ニ招聘セラルテ阿曾ノ間ニ桑蠶ヲ開キ桑
樹ヲ培養良シエセテ招キテ改良蠶蠶制衣絲ノ法ヲ授ケ積年
苦心思案ヲ重ネテ制衣絲機械モ亦明治九年ヲ以テ
完成シヨリテ全國ニ使用セラル後京都府ニ技師ト爲リ
二十五年繰繰褒章ヲ受ク二十五年歿ス年七十七其
ノ畢生國益ノ爲ニ盡瘁シタルノ功鮮カラス

攝州池田造酒業篤學者

故 山川 大作

考證、幽子、長し史蹟、顯彰保存、勉む安
政二年京都所司代、帝陵頽敗、狀を陳し元禄
享保、論定粗漏アルヲ慨し山陵檢討ヲ建議スル
者アリ所司代乃チ檢陵ノ事ヲ著手ス大作素ト勤
王ノ志篤シ起テ諸陵ヲ巡檢シ山陵考略ヲ著ス
事所司代檢陵ノ前ニ在リ民間、篤學者ヲ以テ斯
ノ世ヲ成ス功勞殊ニ録ス可キモノアリ

内 閣

大阪洋曆總子者

故間 五郎兵衛

今、星曆學上、宿疑ヲ解キテ贈從四位麻田剛
立ヲ敬慕歎セシノ望遠鏡ヲ創製シ其ノ他製スル
所ノ儀器十數、下ラス算法ノ著作ヲ贈レ尺度變
遷ヲ明セリ寛政政曆ノ際剛立ノ推薦スル所ナリ
高橋東因ト共ニ幕府ニ徵サレテ曆局ニ在リ其ノ
事ニ與ル長崎ニ赴キテ日食限ヲ查驗シ邊海ノ
里程ヲ測量ス東因卒スルニ及ヒ其ノ遺業ホタル西洋
新法曆書ノ翻譯ニ從事シテ之ヲ完成セシム大阪
新館子ノ先驅トシテ知ラレ長涯ノ號ヲ以テ稱セラル

内閣

大阪醫道解剖整骨術鼻祖

故 各務 相二

名文獻ヲ以テ行ハル解剖整骨術ノ鼻祖タリ私ニ
各務流ヲ以テ稱ス救産器八種ヲ創造シテ産
科ノ救補ニ資シ解剖整骨ヲ研習スルカ爲ニ夜
ニ乘シ妻ヲ從ヘ間行シテ安治川下流ノ葭島刑場ニ
赴キ委棄セル刑屍ヲ収メ夫妻相昇ヒテ歸ルヤ之ヲ
牀下ニ置キ檢視攻究シテ人體骨骼ノ眞態ニ運
轉機能ノ實理トヲ研鑽ス此ノ如クスルニ數十回ニ

内

及ヒ竟ニ自得ニ發明スル所アリ是ニ於テ器械繃帶諸
法ヲ創始シ良工ニ命ジテ木製衣ノ人體骨骼模型
ヲ作ラシム四肢百骸關節運動ノ由ル所備ハラサ
シ業ヲ授クル必ス手撫目察シテ其ノ機關ヲ曉シ
ム文政二年其ノ一軀ヲ幕府ニ獻ス幕府之ヲ躋
臺時館ニ置キ贈正四位大槻玄澤ノ著重訂解體
新書ハ其ノ眞ニ通シルヲ稱セリ救正骨新書ニ卷補
遺ニ卷七ノ著アリ

堺成島港灣私費修築創業者

故 田中 治兵衛

寛文四年、海嘯ニ依リ堺港ニ湧出シタル成島ノ砂洲横ハレ為寢具永元年大和川改鑿並ノ事アルヤ堺港ノ土砂愈堆積シ港内碇泊ニ便ナラス一港ノ衰頽益甚シキヲ見治兵衛慨然トシテ改修ノ志ヲ起シ私費ヲ抛テ長百二十三間幅十間ノ掘割ヲ通シ十町ノ海面ニ長七十間高一丈三尺ノ防波石堤ヲ築キ其ノ前後ニ五十間又ハ三十間ノ砂留ヲ設ケ修築ノ工成リシ

内 閣

後出入船舶ノ石錢ヲ以テ其ノ費ヲ償ハムトノ經書更テ立テ堺町奉行ニ出願スルト再三毎ニ用ヒラヌ乃チ百保十二年江戸ニ出テ勘定奉行稻生下野守ニ出願シタルモ堺町奉行ノ添狀ナキヲ以テ却下セラレヨリ遂ニ死ヲ決シテ箱訴訟ノ與テニ出テ三週ノ願書ヲ投シタルニ願意始メテ達シ江戸町奉行大岡越前守ヨリ堺町奉行ニ訴狀ヲ送付シ堺町奉行ニ再ヒ出願セシムヨリ許可ヲ得將ニ起工セムニ病篤ク遂ニ起タス中退命シテ又家丹屋市兵衛ニ囑シ其ノ子ヲ助ケテ工ニ從ハシメ三年ヲ閱シテ工竣ル工費鉅額ニ上ホリシモ港運亦盛ヲ致セリ

堺港改修經畫創業者

故 吉川俵右衛門

安永六年夏長三古子保年間ヲ以テ改修シタル堺港ノ填塞用ヲ成ササルヲ見テ別ニ南灘ヲ船溜所トシ開キ防波堤ヲ造リ溝渠ヲ浚深開鑿金セムコトヲ堺町奉行ニ出願シ許可ヲ得カ爲ニ百方其ノ道ヲ悉クシ遂ニ縲紲ノ身トナルヲモ願ヒス江戸ノ材木商ヲ以テシテ必ラス改修ヲ遂ケムコトヲ期シ屢セサルヲ十五年ノ久シキニ滿リテ漸ク允許ヲ得ルヤ又

内閣

海嘯ノ爲ニ其ノ土工ヲ破壊セシレ既ニ私費ヲ投スルヲ二萬金ニシテ此ノ火殃ニ遭ヒ而カモ尚屈セスレテ私人ノ經營ヲ移堺町奉行ノ公營トラレノムコトヲ數願シ十箇年繼續ノ經畫且遂ニ確立セシレテ前後三十四年ノ長歲月ヲ費シ文化七年ヲ以テ南灘修築ノ功ヲ竣成セシムルニ至レリ工成テ幾クモアラス其ノ歳ヲ以テ病歿セリ

幕府諸藩用金調達方

故鴻池三代目善右衛門

大阪ニ在テ面替業ヲ専業ト爲シ幕府並諸藩
ノ用金ヲ調達シ兼ホミ一般金銀ノ融通ニ從事
セリ北河内中河内西郡ニ跨リテ素トニ天池沼アリ一
ヲ深野池トイヒテ新開池トイフ大和川ノ水流潑洄
漚渚大ニ成セル所ナリ川ノ水源地森林伐採シ盡サ
レテ強雨毎ミ土砂ヲ流シ河床池底愈々淺クシテ一旦
驟霖ニ遭ハ濁潦漲溢シテ禾苗腐朽シ家屋

内閣

橋梁ヲ流シ人畜ヲ害スルヲ屢次ニ及ヘリ幕府
乃チ土民ノ愁訴ヲ容テ寛永元年大和川河道修
築ホエヲ起シ堤港ニ至ル所謂新大和川ヲ開鑿金
ニ更ニ舊大和川河道ヲ狭クシ池沼ヲ埋メ立テ之ヲ
富田ニ拂ヒ下ケ三箇年ノ鉏下ヲ以テ新田ヲ開墾セ
シムルノ經畫ヲ立ツ其ノ新開池面埋立地ノ拂ヒ下ケ
ヲ受ケタル者二人共ニ水面高ク泥土深クシテ新田ノ開
墾ニ艱ム三代目善右衛門之ヲ聞キテ以テ之ヲク
祖父幸元寛永ノ初始メ難波ニ來リシ以來治世ノ
恩澤ニ依リテ富田榮人後ニハ洛テサルコトヲ得タルモ

明治五年壬申
易カラシムル
メ徒来別家
等ハ悉皆

幕府諸藩用金調達方

故鴻池三代目善右衛門

替業ヲ専業ト爲シ幕府並諸藩
通シ兼ホ一般金銀ノ融通ニ從事
河内西郡ヲ跨リテ素トニ天池沼アリ一
ヒヲ新開池トイフ大和川ノ水流潑洄
ル所ナリ川ノ水源地森林伐採シ棄置サ
土砂ヲ流シ河床池底愈淺クシテ一旦
ハ濁潦漲溢シテ禾苗腐朽シ家屋

内

閣

人畜ヲ害スルコト屢次ニ及ヘリ幕府
訴ヲ容テ寛永元年大和川河道修
堀港ニ至ル所謂新大和川ヲ開鑿金
和川ノ河道ヲ狭クシ池沼ヲ埋メ立テ之ヲ
ナ三箇年ノ鉋下ヲ以テ新田ヲ開墾セ
テ立ツ其ノ新開池面埋立地ノ拂ヒ下ケ
人共ニ水面高ク泥土深クシテ新田ノ開
代目善右衛門之ヲ聞キテ以テ爲ラウク
元永ノ初始ニテ難波ニ來リシ以來治世ノ
富田榮人後ニハ洛テサルコトヲ得タルモ

明治五年壬申四月他ノ山中苗字ト殊別シ
易カラシムル爲メ苗字山中ヲ鴻池ト改
メ従来別家等ニ認許セシ鴻池ノ屋
号ハ悉皆停止セシム

既ニ三世今池面徒ラニ魚鳥ヲ捕ヘ葭葦ヲ刈リ
テ糊口ニ供スルヲ見ルニ池ハ無用ノ物ニシテ是等ノ諸人
ハ皆遊民ナリ天地ノ間ニ曠廢ノ者アルヲ一轉シ治セ
恩澤ニ依リテ得タル此實カヲ吝マスニ此ニ二者良田良民
タラシムルコトヲ得ハ聊カ天地ノ恩ニ報シ治世ノ惠ニ酬
ルコトヲ得ヘト遂ニ意思ヲ決シテ二人者ノ拂ヒ下ケ地二百
二十一町四反五畝ヲ讓リ受ケテ四代目善右衛門ノ名
義ヲ為シ鉅額ノ地代金ヲ官ニ納メ細民ヲ集メ器具
ヲ整正ヘ翌年四月ヲ以テエヲ起シ近郷ノ篤曲長中木利
土工ニ堪能ナル者十人ニ囑シテ工事ヲ監督セシメ自

内閣

カラ主事ヤシテ設計ヲ立テ親シク通勤シテ工役ヲ
督勵シ寒燠風雨ノ為ニ一日ヲ廢セス累年漲
害ニ遭ヒ近郷ノ抗議ニ碍ケラレシモ百難ヲ排シ
テ工程ヲ進メ三年ニシテ功竣ル工費ハ一萬九千八
百餘兩ヲ算シ以テ反別二百十八町餘ノ良田ヲ得
タリ因テ工役ニ從ヒタル細民ヲ土著セシメ家宅ヲ
給シ農具種苗ヲ供シ極寸米肥料ヲ貸與シ年
貢ヲ低減シ賞典給ヲ加ヘテ世龍衣セシメ鴻池新
田ノ一村是ニ於テ成ル其ノ家法ヲ定メ豫備正化員ヲ
確守セシメ家業ノ基ヲ固メタルモ亦其ノ深慮ハ出

舊淡路國阿波藩曲農兵隊長

故 田村 平一郎

安政中海防之急ヲ告グルニ方リ阿波藩曲農兵隊長ノ統ヲ藏
スル者ヲ以テ一隊ヲ成サシメ淡路ノ防備ニ當ラシムルヤ東
西ニ奔走シ新式砲術ヲ習ヒ歸リテニ隊長タリ隊
員前後三千餘名ヲ算ス藩給スルニ俸米一萬石
ヲ以テス文久年中大和ノ義舉ニ應ジ曲農兵ヲ糾
合シテ將ニ發セムトシ洲本奉行ニ召喚セシメテ獄ニ投
セラル京都ノ形勢一變シ七卿西竄ノ事アリハ藩

内閣

論為ニ動搖シタルヲ以テナリ幽囚五年ニシテ王政復
古シハ藩亦兵ヲ出シテ王師ニ參加シ東征ニ從ヒ
藩兵淡路ヲ過キ主將平一郎ノ尚獄ニ在ルヲ見テ驚
キ命ニシテ之ヲ免セシム因テ從ヒ入京セムコトヲ請ヒシモ
衰弱ノ為ニ起ツト能ハス弟ヲシテ代リ往カシメ明治
四年遂ニ病ヲ以テ歿ス

舊姫路藩士

故 三間 半二

名ハ長城舊姫路藩勤王志士、年長者トシテ重
訓ヲアリテ藩主酒井忠績ニ從ヒテ京都ニ至リ四方ノ志
士ト交リテ夙ニ尊王ノ大義ヲ唱フ、文久開鎖ノ論愈
紛糾スルニ方リテ藩内ノ志士奮起シテ京師ニ赴カントスレト
モハ藩老等抑制シテ之ヲ許サズ、半ニ其ノ間ニ處シテ幹
旋盡力到リサルナリ遂ニ志セテ入京スルコトヲ得ル
タリ近歲ニ崛起シタル我徒前後皆敗ルルヤハ幕府

内閣

ノ抑制愈々嚴ク加ヘテ藩内勤王ノ勢益日ニ非ルヲ
致シ元治元年春禁錮ヲ命セシメ其ノ冬家禄ヲ沒
収セシメ終身禁獄ヲ命セシムル幽囚セシムルコト三年ミテ
明治元年春出獄ヲ許サレヨリテハ藩論一定ノ朝命
ニルヲ進テ藩政一新ノ事、從ヒ佐幕派ノ當道與テ
黜罰シテ勤王派ノ人材ヲ登庸スルニ盡力シ後會
計奉行トナリテハ藩財政ノ文系亂ヲ整頓シ廢藩
ノ後海軍業ニ從事シテ兵庫新川ノ開鑿ニ力ヲ致
シ各種ノ事業ヲ經營セシメ明治八年病ヲ以テ歿セリ

舊姫路藩士

故 北村 義貞

舊姫路藩、甲冑製造者贈正五位大高又次郎三門生トアリテ其ノ業ニ從ヒ文久元年又次郎ニ隨從シテ京師ニ在リ足利將軍木像ノ梟首ニ與テ幕吏ノ俘捕ヲ免カレ大和天誅組ノ徒ニ加リテ高取ハ藩政敷キノ際ニ負傷シ尋テ但馬生野ノ義徒ニ府心シ甲冑武具ヲ準備シ又次郎ノ部下ニ屬シテ竹篠山ヲ旅リシモ義徒既ニ敗レシヲ聞キテ京師ニ遁

内

開

レ元治元年勤王ノ志士ニ條池田屋ニ入宵スルノ時ホ之ニ參與シ壬生浪士ノ龍衣敷キニ遭ヒテ同志十五名之ニ死スルヤ負傷シテ浴槽ニ潛伏シ僅ニ遁レテ長州ハ藩邸ニ投シ給御門ノ變長兵ニ加ハリシモ戦利アスレテ復遁レ長州ニ入テ後屢々京都ニ往還シ慶應元年ハ藩内志士ノ下獄者ヲ奪還セムトスルニ興リシモ破獄ノ事敗レテ京師ニ遁レ歸ル三年十津川ノ浪士等高野山ニ據リテ事ヲ興スニ與カリ勤王ノ補助具ニ到ル維新ノ後仕途ニ就キ日清ノ役ニ從征シ公共ノ事ニ盡力セリ

舊姫路藩士

故菅野狷介

天保年中昌平學貢ニ入りテ古賀侗菴ヲ師トシ水藩
ノ諸才俊ト親交アリ徳川齊昭ノ知遇ヲ受ク安政三年
藩許ヲ得蒲柳ノ質ヲ以テ自奮奮意ヲ決シ東奥羽
ヲ經テ蝦夷ニ入り崖谷ヲ渉リ美奈無ヲ排シ黑熊
ノ穴ヲ過キ痔瘡ノ氣ヲ月ニ歲暮骨上室ニ投シテ
雪ヲ啖シ春ヲ待チ踏査周遊シテ之ヲ著作ニ紀シ
海防ノ急ヲ唱ヘテ北門ノ忽セシメハカルヲ説キ以テ

内

閣

藩内ノ子弟ヲ鼓勵セリ安政戊午ノ獄ニ方リ水藩諸
士ノ家ニ狷介ノ書アリシヲ連累ニシ獄ニ繫カレ
後生齒ヲ拔カレテ藩ニ禁錮セラル久三年朝廷
赦ヲ賜ヒテ獄ヲ出テ藩ノ學政ニ參與ス明治二
年兵庫縣ニ辟サレテ司教トナリ伊藤博文ノ為ニ
擢テラレテ外務省ノ徴ニ應シ途兵庫ニ到リテ暴
ニ病ミテ歿ス其ノ履歴自カラ藩内勤王ノ諸士中
ニ在テ異采ヲ放ツ者作辭カラス以テ經術文章早ニ
造詣ノ淺カラサルヲ觀ル可シ

兵庫縣良稻種神力稻發見者

故 丸尾 重次郎

兵庫縣揖保郡御津村中島、竹島曲辰ナリ、冬ニ意
ヲ稲作ノ改良ニ致シ、優秀ナル品種ヲ得ルニマス。ハ以
テ良稻ノ増殖ヲ得ヘカラス。ト為シ精査スルコト多年遂
ニ明治十年秋收穫ノ際ニ至リ有芒種ノ中ニ無芒ノ
佳禾三穗ノ混スルヲ發見シ翌春播種培養良シテ
分蘗ノ力旺ナルノミナラス莖幹短シテ強能シ風雨
ニ耐ヘ、籾亦色澤鮮黄ニシテ外皮薄リ種粒脫離

内 閣

シ易リ米粒大ナラス。ト雖收穫饒多ナルヲテ實験シ
得タリ初ハ名クルニ品量好ヲ以テシ近隣ノ分與シテ
其ノ種ナリ栽培セシメタルニ嗣來遠近ヲテ之ヲ需
メサルニ十九年名ヲ改メテ神力稻ト稱シ種ナノ分譲
ヲ請フ者愈々多ク重次郎ニ十二年ニ致シタル後竟
ニ全國ニ普及シ今ヤ海外ニ輸出セラルルニ至ル

但州生野義徒節制方屬士

故 小山 六郎

文久三年生野義徒、朝旨ヲ奉シ豐辰兵ヲ但馬ニ募ルヤ首トシテ其ノ謀ニ與リ節制方ニ屬シテ專ラ豐辰兵ノ指揮ニ任ス既ニシテ事敗レテ志士四散シ六郎亦京攝ノ間ニ遁ル流亡アリ異表ニ志士ト稱スル者ハ盜賊ナリ良民ヲ欺キ盜賊ノ手足タラシメタルハ六郎等ノ奸計ニ出ツト豐辰兵ニ屬セシ者相率ヒテ義興等ニ參與セシ者ノ家屋ニ闖入シ柱梁戸牖ヨリ瓦石ノ器具ニ至ルマデ破碎毀

内

關

傷シ六郎ノ家最モ慘ヲ極ム後長門ニ走リテ其ノ遊撃隊ニ投ス生野義徒ノ長藩ニ倚リシ者少トセス六郎ヨリテ明ノ史ニ明治元年始メテ郷ニ歸ル山陰道鎮撫總督西園寺公望師ヲ率ヒテ但馬ニ入ルヤ生野ノ義興等ニ與リ切アリシ者二十餘人ヲ擧テテ士格列シ帶刀ヲ許ス六郎亦與カル因テ奮勇ニ從軍セムト請ヒシモ廢疾ヲ以テ許サレス後朝來郡ノ久美濱縣ニ隸シ新制ヲ布カルヤ民皆之ヲ不便トス素ト生野代官所ニ屬シタルヲ以テ新ニ他ニ隸スルヲ居月シトセサルヲ六郎疏ヲ作シシ崎田ヲ諭ユルコトニ十里ニテ縣衙ニ呈シ歸路未タ

家に至るナル數町ニミテ轡ヲ停メレノ屠腹スレト死ス其
ノ意蓋シ一死以テ時弊ヲ切諫スルニ在リ其ノ建國
立紀廻ニ外國ニ異トスルニ而カモ有司大體ニ通ス一
外國ノ制度ニ莫テ倣ス是ヲ以テ桷斂金行ハストイフカ
如キ其ノ牧民ノ官苟モ其ノ人ヲ得サレハ則テ民其ノ
害ヲ受ク今ノ任スル所往々其ノ人ニ非ラストイフカ如キ又
其ノ臣カ郷本ト穀ニミテシテ舊制租ノ半ヲ折シ易フルニ
銀幣ヲ以テシタルニ今其ノ制ヲ廢シテ悉ク現穀ヲ徵スト
イヒ民困ミシテ若シ哀訴スルトモ其路殆ど塞ミテ曾テ
賸納ナレ專ラ威刑ヲ以テミテ攝ストイフカ如キ其ノ死ヲ以テ
切言進諫ミタル所昭チトシテ明ナリ一私ニ涉ルモノナレ
義徒ヲ以テ始マリ義民ヲ以テ終ル者ト謂フ可シ

内

閣

丹後國竹田町諏訪神社祠官

故 宮本池臣

平野次郎美玉三平等生野、義興ヲ策スルヤ池臣
有レシ其ノ謀、興リ其ノ居諏訪祠畔ニ在リ人家
隔絶シ密議ニ便アリシヲ以テ志士來テ此ニ會合シ事ヲ
謀レリ義興ヲ敗レテ志士四散ス其ノニ子共ニ義興ヲ
ニ興カリ一子ハ伊勢ニ走り一子ハ之リ所ヲ知ラス池臣親シ
ク機密ニ参リ興シタルモ表面ニ立タカリシヲ以テ幸ニ嫌疑
ヲ免カレタリト雖國中ノ志士其ノ門下ノ士多ク何レモ其ノ
ハ黒陶ヲ受ケサルナシ明治ノ初久美濱縣ノ命ニ依リ但
馬丹波丹後三國ノ式内神社ニ百六十七座ノ所在ヲ決
定シ佛像ヲ奉スル者ヲ撤シテ神社ノ來由ト齋祀ノ
神明トヲ昭シテ神社崇敬ノ美風ヲ興セリ

内 閣

但馬國八鹿町酒造業者

故 西村 莊兵衛

生野義徒、曲兵、但馬、其方ルヤ、莊兵衛其、近
親ヲ誘ヒ率先シテ之ニ赴キヨリ、與テ兵ノ方略定
マリハ莊兵衛ハ一族ヲ率ヒテ妙見山ニ陣セシモ曲兵、
反西復ニ因リテ率敗ル乃チ脱シテ歸郷シ捕ヘラレ
生野代官所ニ檻致セシ後其ノ家ニ禁錮セラル
コト五箇年王政復古シテ山陰道鎮撫總督西
園寺公明王八鹿ニ入ルヤ待ニハ莊兵衛ノ家ニ館シ其、
内 閣

幽閉ヲ解カル明治十六年歿ス

舊越前大野藩士

故 吉田 拙藏

樺太開墾ノ先驅タリ藩主土井利忠ノ樺太拓殖
ノ經畫シ洋形ニ桅船大野九ヲ建造シテ安政ノ初
敷加賀函館樺太ノ間ヲ往來シテ交通漕運トシ
海上ノ敬言成トシ當ラシムルヤ主トシテ其ノ事ニ當リ樺
太ノ探檢ヨリ開拓ノ準備ヲ始ムルニ至ルマデ其ノ事
ニ從ヘリヨリ幕府ノ海軍所ニ入リテ航海ノ術ヲ修
メ洋形船船建造ノ事アルヤ幕府命ニ依リ羽田ノ

内 閣

造船廠ニ投シテ其ノエヲ督シ船成ルヤ主ニ船長トシ
テ能ク其ノ職ヲ盡クセリ米船スヅング號ノ江差
沖ニ難破シタル際船員救助ノ爲奥尻島ニ赴キ
猛風激浪ト戦テ能ク其ノ使命ヲ完ラシタルカ如キ
ハ當時中外ノ感賞員シテ措カカリシ所ナリ後藩命
ニ依リ北蝦夷總督ノ事務ヲ管掌シ明治元年
其ノ名義ヲ以テ樺太開墾場ノ上地ヲ請ヒ親シ
函館總督清水公秀ニ從テ函館ニ航シヨリヨリ樺太
ニ赴キ上地ノ準備ヲアセリ爾後教育ノ爲ニ盡カシ
明倫中學校ヲ創設シ明治二十年東京ニ歿ス

舊鳥取藩岩井郡中庄屋役

故村上源藏

文久三年以來舊鳥取藩岩井郡中庄屋役ヲ
勤務セリ藩主池田慶久徳ハ將軍徳川慶久喜喜ノ
安貝弟タリ故ヲ以テ慶喜既ニ大政ヲ奉還シ王政
復古ノ大令下リテ歲改マリ慶應四年一月鳥羽伏見
ノ戰アリ二月東征大總督咸仁親王出巡セラルル方
リテ朝廷深ク意ヲ中國諸藩ノ鄉向背ニ用ヒカセ
ラレ是ノ月特旨ヲ以テ勅使西園寺公朝王ヲ山陰道

内

閣

鎮撫總督トシテ差遣シ沿道諸藩ノ政情ヲ巡
閱セシラルルヤ時尚慶久喜喜恭順罪ヲ謝スルノ一
月前ニ在リシヲ以テ幕府ノ連枝ヲ藩主ニ仰ケル舊
鳥取藩ハ殊ニ疑惑ノ府ト爲リ當然佐幕ヲ主
持シ朝命ニ抗スルモノトシテ巷間ニ傳ヘテ非出語
紛紛トシテ人心恟恟タリ隨テ一藩士民齊シク戒嚴
シテ勅使ノ來臨ヲ待テ勅使守衛ノ任ニ在リシ薩長
ノ藩兵モ亦深ク戒心シテ府署キテ封境ニ入ルノ狀ナ
リレニ因リ此ノ如キ兩面相危惧スルノ際ニ在テハ一直モノ
過誤ナリトモ忽チ延キテ不測ノ禍ヲ醸スミ至ルノ虞ハ

アリ勅使既ニ封境ニ入り岩井郡細川村ヲ通過セラ
ル是ノ日正ニ二月五日源藏郡ノ中庄屋役タリシヲ以テ
人馬繼立ノ事務ヲ管掌シタルニ當時人心疑懼ヲ
抱キシト士民未タ勅使ノ尊キヲ知ラサリトノ爲徴發
意ノ如キヲ得ス役夫混雜ヲ來タレテ人馬ノ繼立ニ又
障ヲ生スルニ至リ源藏之カ爲ハ藩主ニ抗命ノ意
アリトノ嫌疑ヲ生シ薩長ハ藩兵或ハ一彈鳥取城
ヲ攻殺スル如キアラハ藩主勤王ノ志明ニ難ク勅
使ノ威尊亦爲ニ潰貝月セラレ封境ノ中意外ノ事
端ヲ開クニ至ラムコトヲ慮カリ龜津ノ禮ヲ勅使ニ

内閣

失シタルハ一ニ自己ノ職務ニ關クル所アリシニ因ルト爲シ
村ノ一民全口ニ入りテ自刃シ以テ其ノ主君ヲ弔ヒ思ホ
ハ藩主ニ及ホスコトナシテ禍ヲ未然ニ防ケリ勅使其
ノ志ヲ諒トセラレヨ時テ十五日手書ノ感狀ヲ遺族
ニ授ケラレ其ノ一死ヲ以テ武門戰場ノ横屍死ニ比セラ
レハ薩長ハ藩兵添書ヲ附シテ其ノ志ヲ稱揚シハ藩
亦其ノ後ヲ殊遇シ以テ明治五年ニ至ル雨來源藏ノ
彰表申絶シ以テ今日ニ至ル然レトモ源藏ノ一死能ク
山陰道ノ靜穩ヲ完カラシメ諸藩相率ヒテ王事
ニ勤ムルヲ致シタルハ功固ヨリ録ス可キモノアリ

伯耆國加賀茂村水路開鑿金者

故 安藤伊右衛門

居村賀茂村ノ灌溉ニ供セラルル私都川ノ一流ニ養
水ヲ仰クモノ三十八箇町村ノ多キニ互リ水論絶エ
トナク閘里不安ナルヲ直ニ私財ヲ投シテ溝渠
溪山ノ間ニ開通スルノ規畫ヲ立テ鳥取藩ノ許
可ヲ得テ其ノ功ヲ竣ヘタルヲ見ルニ土工三箇年ニ滿
リテ水路ノ延長ニ里二十八町十間ニ達シ水路通
スル處山腹ヲ紆盤シ溪谷ヲ踰ユルニ楢樋ヲ以テシ

内 閘

隧道ヲ穿テ埋樋ヲ用ヒ閘門ヲ備ヘ隄防ヲ起シ
岩石ノ開鑿金ニ最モ艱ヲ覺ヘシニ似タリ水路竣
リテヨリ從來ノ田面二百七十五町歩ニ於テ復旦魃
ニ苦ムノ患ナキニ至リシニナラス新ニ良田二十七町
餘ヲ開鑿シ餘澤永ク後代ニ及フ文政三年工
ヲ起シ六年ニ至テ竣ハリ十年ニ滿リテ破ス其ノ
家永ク新開地ノ租十分ノ二歩五厘ヲ世祿トシテ
給セシレモ明治五年ニ至リテ罷能ム

元鳥取縣典事

故 伊王野坦

藩主故從二位池田慶文德ノ内意ヲ承テ文久ノ初京
師ニ在テ周旋方ノ任ニ當リ尊攘ノ志士ニ交ハル幕
府征長ノ軍ヲ起スヤ藩命ヲ以テ廣島ニ赴リテ教
回國事ノ爲ニ盡瘁スル所多シ王政復古ノ後仕
官シテ久美濱縣權知事ニ任セラレ敏中制ノ事ヲ以
テ太政官ノ忌諱ニ觸レテ官ヲ免セシモ後鳥取
藩少參事ニ任セシ鳥取縣典事ニ爲ル官ヲ辭シテ
ヨリ鳥取ニ在テ殖産興業ノ事ニ盡力シ舊士族
授産ノ爲授産社ヲ設立シテ貧窮ヲ濟メノ方途ヲ
講ニ後病ヲ以テ歿ス

内

閣

舊岡山藩醫館藩校皇學科教頭

故 上田 及 淵

肥前天草ノ人ナリ眼科醫館上田公鼎ニ養育レ家ヲ嗣
ク公鼎本居氏ノ門ニ出テシヲ以テ皇學ヲ主トスルニ途
訓ヲ受テ從ヒテ備中ニ移リ住ス公鼎歿ス及テ京
攝問ニ遊ヒ皇學ヲ研鑽シテ歸郷テ出テ醫
業ヲ大阪ニ開テ嘉永四年岡山ニ移リ醫館兼テ旁徒
ヲ取テ皇學ヲ講ス名聲藉甚治ヲ乞フ者門
ニ填ス及淵博聞強記ニシテ皇學補内閣ナラズ音

韻學天文地理周易七書等ニ明ナリ武技ニ達シ水
馬ニ騎ルニ巧ナリ醫術ハ蘭ニ出ルヲ以テ理學ノ智識
ニ富メリ皇學ニ於テハ贈從四位大國隆正ト學說
相合シ意氣投合シ互ニ推擢大セリ隆正ノ說安貝ニ
王政復古ノ朝儀朝典ニ根軸ト為レリ舊岡山藩主
池田茂政與テテ藩醫館ト為シ文藝ヲ兼テシ明治元
年和氣清磨館兒島高德ノ事蹟ヲ調査シヨリテ明
ヲ究ヒシモ研盡念無懈ス八年特ニ教部省ヨリ樽大講
義ヨリテ大講義ニ補セリ其著日本補史四卷三經
大義十二卷最モ望ミシ人オ其ノ門ニ非出スニ年歿ス

舊岡山藩兒嶋郡塩田創設者

故野崎武左衛門

文政ヨリ安政ニ至ルノ間ヲ以テ開拓シタル塩田及稲
田等ノ面積實ニ八百七十四町歩ニ及ビ年々産出
スル良塩二十餘萬石ヲ算シ米穀亦一萬五千餘
石ヲ計上スルニ至レリ其ノ作園ヲ一轉シテ人烟稠密
ノ區ヲ開カシメタル功勞顯著ナルモノアリ

内

閣

備中江原前興讓館長

故坂田 丈平

贈正五位阪谷朗廬ノ後ヲ襲キ舊一橋家領
内卿興讓館ニ館長トナル事ハ明治元年ニ
在リ後小田縣督學ヲ兼ネ更ニ閑谷遺芳館
教授ヲ兼ヌ其ノ學國家ノ綱常彝倫ヲ培植
スルニ在リ興讓館ノ學風蔚然トシテ一境ヲ化シ人
材ヲ輩出シテ知家ニ寄與スル所多シ後京都同
志社東京慶應義塾高等師範學校斯文
學舎哲學館ニ教授若ハ講師ト爲リ漢文ヲ授
ケ教鐸ヲ秉ルコト三十餘年一日ノ如ク三十二年病ヲ
破ス敬告軒ノ號ヲ以テ儒林ニ重セラル

内

閣

故 本莊 重政

右重政、本左衛門、稱シ露石ト號ス
寛永年中水野勝成ニ仕ヘテ普請奉
行タリ嘗テ島原ノ亂起ルヤ重政寺澤
忠高ニ屬シ政戦シテ先登ノ功ヲ奏ス
夫ヨリ池田光政ニ仕ヘマタ山鹿素行
ト舊誼アルヲ以テ播州赤穂ニ潜ミ終ニ
水野氏ニ仕ヘテ福山ニ至ル重用セラレテ
厚祿ヲ食ヒ講兵ノ外常ニ經濟ノ志
ヲ抱キ明暦萬治ノ際廣ク海濱ヲ埋メ
テ鹽田ヲ興シ洲潟作ルニ關キテ新田
ヲ作ル農商足月聚リ富庶市廛ヲ設
ケ寛文中遂ニ松永ノ稱ヲ得タリ延
寶四年二月十五日重政齡七十ヲ以テ
病歿ス町民深ク重政ノ功德ヲ感仰
シ本莊神社ヲ建テ其ノ威靈ヲ祀ル
ニ至ル後々明治三十年第二回水産博會ノ
開カルヤ重政カ鹽田開築ノ遺功ヲ厚
ク追賞セラレタリト云フ

故平山角左衛門

右角左衛門ハ舊廣島藩士ナリ資性慧敏頗ル吏才アリ尾道町奉行ト爲リ民政ニ盡瘁シテ治績大ニ與テカル尾道港灣ヲ築成シ以テ民衆交通ノ便利ヲ開キ商賈ノ繁華ヲ導キ人々其ノ德恩ヲ悦ビ遂ニ平山靈神社ナルモノヲ建設シ毎歲築港記念日ニ當リ神靈ヲ祀リテ功勞ヲ報ユ尾道市カ今日ノ殷富隆昌ヲ觀ルハ主トシテ角左衛門ノ舊功ニ起因セルモノト謂フヘシ

内

閣

七代目
故栖原 角兵衛

右角兵衛ハ諱ヲ信義ト云フ紀州有
田郡栖原ノ人ナリ初代角兵衛ハ總房海
ニ至リテ漁場ヲ開キ二代角兵衛ハ江戸ニ商
塵ヲ創メ三代四代ノ角兵衛ハ専ラ祖業ヲ
承ケテ商業ニ従事ス五代角兵衛ハ北海
ニ航シ松前福山等ニ店舗ヲ設ケ海産
其他ノ商業ヲ營メリ六代角兵衛ハ天
塩十勝各地ニ多數ノ漁場ヲ獲テ益
海事ニ奮勉セリ七代角兵衛信義ニ
及ビ専ラ父ノ嚴命ヲ守リ天塩原野
ノ開墾ニ従事ス荆棘ヲ薙キ沼澤ヲ
埋メ丘陵ヲ開墾シテ道路ヲ通セリ
且ツ海上航路ヲ開テ克ク事業ノ發
展ニ務ム文化中松前藩ヨリ石狩各
所ノ漁業ヲ命セラレ又更ニ北蝦夷一
帶ヨリ樺太ニ至ル漁場ヲ預ケル寛
政初年露人ノ變警アリシモ角兵衛
苦心萬難ヲ排シ能ク漁業ヲ繼續セリ

況や樺太ノ開拓ニ着手セルカ如キハ眞
ニ南兵衛ヲ以テ嚆矢トス文化中高田
屋嘉兵衛等ト根室ノ漁業ニ從事シ
文政中々厚岸ノ漁場ヲ經營ス後チ
八代九代十代ノ南兵衛等相繼テ事業
ノ發達繁榮ヲ見ルニ至リシモノ全
ク七代南兵衛ノ規畫餘烈ニ由レリ
ト謂フ

内

閣

故笠松 左太夫

右左太夫ハ紀州日高郡笠松村ノ人ナリ
往昔祖先ハ一城主トシテ武勇ノ名ヲ傳
ヘシモ子孫落魄シテ家道大ニ空窮ス左太
夫少時父ヲ喪ヒ貧困身ニ迫ルモ勤勉刻
苦日夜怠ラス蓄積以テ亡父ノ舊債ヲ悉
ク償還シ盡クス至ル寛永中藩主賞シ
テ山保田莊ノ大莊屋ト爲ス左太夫深ク村民
耕農ノ空窮状ヲ察シ水利ヲ開キ殖産ノ法

内

閣

ヲ設ケント欲シ藩府ニ請ヒシモ許サレス遂ニ
自カラ私財ヲ擲キ晝夜工事ヲ督シテ溝
渠ヲ鑿金チ有田川ノ水ヲ引テ旱害ヲ除キ新
田ヲ開クモノ多シ又農村ノ副業トシテ紙漉
業ヲ起サント志シ萬治中左太夫和州吉
野ヨリ工人ヲ招キ始テ七種ノ紙ヲ制衣シ之
ヲ保田紙ト唱ヘ現今有田郡主要物産ノ
一トシテ販賣隆昌ヲ極メ恩澤ノ力ヲ雨沾
スモノハ專ラ左太夫ノ恵ニ歸ス明治十六
年聯合共進會ニ於テ左太夫製紙ノ前功

ヲ追賞セラル寛文十三年六月十九日
齡七十八ヲ以テ歿ス左太夫利水壠田
製紙ノ功績洵ニ稱揚スヘキナリ

内

閣

故田中善吉

右善吉、紀州有田郡箕島ノ人ナリ
稟性篤實、夙ニ殖産興業ニ志ス。家
道富裕ナルヲ以テ、船數艘ヲ造リ、商貨
ヲ九州ニ送リテ販賣ス。元文中砂糖製
造ニ關シ、藩命ヲ承ケ、薩摩ノ大島ニ入リ
甘蔗栽培ノ法ヲ傳習シ、蔗苗ヲ得テ歸ル
コト、榲實ノ收益多キヲ實見シ、只管榲
樹栽培並ニ製蠟ノ方法ヲ傳習シ之ヲ
紀南ノ地ニ試植セシカ、頗ル好良ノ成績ヲ
奏シ、從テ製蠟ノ業盛ニ起レリ。善吉
藩命ヲ帶ヒ、日夜奔走シテ專心之ニ盡ス。
延享子ヨリ寶曆ニ至リ、各郡殆ト榲樹
ヲ見サル所ナシト云フ。明和四年十二月二日
齡七十四ヲ以テ歿ス。爾後村民等深ク善
吉ノ德澤ヲ感慕シ、祠ヲ建テ其ノ靈ヲ
祀リ、田中神社ト曰フ。明治十七年、和歌山縣
ハ善吉カ植榲製蠟ノ功ヲ賞シ、相續者ニ
厚ク追賞金ヲ贈與セリ。

故賀川 玄悦

玄悦本姓ハ三浦出テ母ノ家賀川ニ養
ハレ其ノ家ヲ繼ク家道ノ困窮ヲ顧ミ
ス常ニ醫術ニ志シ京都ニ入り名家ニ
從學シテ研鑽怠ラス遂ニ産科治術ヲ
獨創シ為ニ患者ノ治術ヲ請フモノ諸方
ヨリ來ル先輩醫師ト雖モ皆之カ説ヲ聞
テ敬服セリ玄悦乃チ産論ヲ著シテ産前
七十五難産後百二十五難ヲ唱フヨリ寸テ
阿波侯ノ聘ニ應シ士籍ニ入リテ食祿
百石ヲ受ク安永六年九月十四日齡
七十八ヲ以テ家ニ没ス其ノ人命ヲ救
ヒ醫道ニ益シタル功績顯著ナリト謂
フヘシ

故高

良齋

良齋、舊阿波藩士山崎好直、次子
ナリ寛政十一年五月十九日徳島助
任村、生ル眼科醫高錦國、養子ナ
リ其ノ家ヲ繼リ乾純水、本草ヲ學ヒ
父錦國、眼科ヲ質ス後々長崎ニ行キ
獨醫「レ」ホルト「レ」就キ蘭學及醫術
ヲ學子ヲモノ八年ニ涉リ日夜研精學
力大ニ進ミ「レ」ホルト「レ」深ク其ノ才能ヲ

内

開

愛ス文政中「レ」ホルト「レ」幽閉セラル、
當リ良齋等モ亦嫌疑ヲ以テ入獄セシカ
後々釋サレテ阿波ニ至リ子弟ヲ集メテ蘭
書ヲ講シ醫術ヲ授ク天保中大阪ニ出
テ名聲最モ喧シ夫ヨリ明石侯ノ眼疾ヲ
治療シテ同侯ノ侍醫ニ聘用セラル弘化三年
九月十三日齡四十八ヲ以テ歿ス

故楠藤吉左衛門

吉左衛門、阿波國名東郡島田村ノ豪農ニシテ里正タリ村民カ田畑ノ給水ニ苦シムヲ察シ自カラ私財ヲ投シテ日夜灌漑ノ工夫ヲ費シ神佛ニ誓願シテ民苦ヲ除カンコトヲ期ス精神ノ通スル所遂ニ良水源ヲ得テ忽チ灌漑ノ便ヲ開キ多クノ沃田ヲ成スニ至ル當時藩廳ニ厚ク吉左衛門ノ功ヲ賞シテ苗字帶刀ヲ免許セリ

内

関

其ノ私財ヲ惜マス生命ヲ賭シテ公益ニ盡クセム所ノ功績洵ニ嘉加賞スヘシ

故工藤 剛太郎

剛太郎ハ阿波國美馬郡脇町^字猪尻村
ノ人ナリ 稲田氏ノ家臣ニシテ 天保四年
五月二十四日生ル人ト爲リ 慷慨ニシテ氣
節アリ好テ武技ヲ善クシ嘉永癸丑以
來京阪江戸諸方ニ奔走シ志士ト交リ
テ國事ニ幹旋ス萬延文久元治慶
應ノ際有志ノ義舉ヲ援ケ爲ニ一時
幕譴ヲ受クルコトアリ 明治元年正月
伏見鳥羽ノ事起ルヤ宮門ノ守衛
ニ列シ勤勞ヲ賞セラレテ天盃ヲ賜
フ是ヨリ官軍ニ從ヒ各所ノ戰役ニ
出征シテ功績アリ

故南 薰風

薰風ハ阿波國美馬郡江原村ノ人ニシテ稲田氏ノ家臣ナリ天保七年正月十日生ル資性健剛ニシテ大志アリ嘉永年間海内騷然風雲ノ急ナルニ際シ奮然家ヲ出テ同志工藤剛太郎等ト京師江戸ノ間ニ奔走シ當時ノ諸豪ト結託シテ勤王ノ事ニ幹旋セリ慶應間幕譴ニ遭ヒシカ後々釋サル明治元年

内

関

正月鳥羽伏見ノ事起ルヤ剛太郎等ノ同志ト宮門ヲ守衛シ勤勞ニ對シテ天益ヲ賜フ夫ヨリ奥羽其ノ他ノ征討軍ニ從ヒ盡瘁セル所ノ功績洵ニ顯著ナリトス

故 村岡 宗四郎

宗四郎、弘化三年十一月朔日讃岐
國那珂郡丸龜ニ生ル早ク父ヲ喪ヒ
母ニ依リテ教育ヲ受ク母ハ貞淑ノ賢
婦人ニシテ宗四郎ノ人ト為ルヤ其ノ家訓
ニ歸ス又伯父小橋安藏同木内順二ノ教ヲ
受ケ心ヲ尊攘ノ大義ニ存シ安政以來
深ク勤王ノ志士ト交リ國事ニ幹旋シ
テ已マス慶應二年俗吏嫌疑ヲ構ヘテ
宗四郎ヲ幽囚ス翌歲憤慨ノ餘遂ニ
幽死セリ生前國家ニ盡セシ所ノ功
績洵ニ顯著トス

故木内 順二

順二ハ讃岐國香川郡圓座村ノ人ニ
シテ小橋山女藏ノ弟ナリ龍山ト號ス文化
八年十二月五日ヲ以テ生ル幼ニシテ學ヲ
好ミ諸名家ニ隨ヒ研鑽ノ功大ニ顯
レ著書頗ル富ム嘉永永安政以降海内
騷然常ニ多事ナルニ當リ兄安藏女婿
太田次郎甥小橋友之輔具ノ他誠忠ノ
士ト謀リ終始國事ニ幹旋シ慶應三
年兄安藏カ獄中ノ苦状ヲ慨シ痛憤
シテ死セリ洵ニ惜ムヘシ

故三上 景雄

景雄ハ是庵ト號ス伊豫國松山ノ人ナリ
夙ニ學術ニ志シ諸所ニ遊學シテ廣
ク當時ノ名士ト親交ヲ結ヘリ安政中
頻ニ時勢ヲ慷慨シテ勤王ノ義ヲ唱ヘ幕
府ヲ廢シテ政權ヲ皇室ニ奉還センコト
ヲ論シ國防ノ急務ヲ説ク慶應間松山
藩ハ佐幕論ヲ持シ藩論之カタメニ分裂
シテ一藩ノ方向ヲ失ヘリト雖モ景雄進テ
大義名分ヲ陳ヘ速ニ封土ヲ朝廷ニ納レ
恭順ノ實ヲ舉クヘシト勸ム維新ノ
際遂ニ景雄ノ力ヲ以テ藩論ヲ決シ方向
ヲ定ムルヲ得タリ又慶應藩治縣ノ後景雄
專ラ子弟ノ教育ニ力ヲ盡シ國家ニ補益
セルノ功勞洵ニ顯著トス

故 安藝 三郎左衛門

三郎左衛門ハ永禄天正ノ頃土佐國土佐
郡成山村横敷ニ居住ス偶ニ製紙業ヲ
創意シ漸次其ノ技ヲ近郷ニ傳フマタ
木葉ヨリ染料ヲ採リ之ヲ製紙ニ應用
シテ色紙七種ヲ抄造セリ慶長中山内
一遊ノ土佐ニ轉封シテ來ルヤ三郎左衛門
謁見シテ抄紙數品ヲ獻呈セシカハ其ノ
褒賞トシテ居村内ノ田畑ヲ給與セラル
製品ノ佳良ナルヲ以テ御用紙方ヲ命セ
ラレ毎々献上品トシテ製造スルコトハ
ナレリ夫ヨリ抄紙ノ業國內全般ノ生業
ト爲リシカハ三郎左衛門ハ監督ニ任セラレ
三十四年間御用紙役及ヒ幡多郡代官
役ヲ勤仕シ寛永十一年ニ病歿セリ子孫
取締役ヲ繼承シテ維新ノ際ニ至ル明治
十七年高知縣知事ヨリ同十九年農工商
務大臣ヨリ執レモ前功ヲ追賞セラレタ
リ

教部大丞

故正五位 門脇重綾

名和長年一族、事蹟ヲ顯彰スルニ勉メ、舊鳥取
藩學實ニ國學ヲ教授トシテ、伯耆誌ノ編纂亦從ヒ
ヨリテ、京都、祇役シ元治甲子ノ變ニ際シテ、幕
府ノ嫌疑ヲ受テ潜伏シテ免カル、延長兩度ノ役無
名ノ師ヲ不可トシテ建議論諍シ名聲志士ノ間ニ
重シ其ノ長ハ藩士ニ知己多ク京師ノ形勢亦一變
シタルカ爲長ハ藩士桂小五郎ヲ庇保スルニ連坐シ
テ其ノ郷里渡村ニ幽囚セラル幸ニシテ幾クモアラス
王政復古ニ幽屏ヲ解カレテ京都ニ上リ其藩論ヲ
一定シテ直ニハ藩兵ヲ伏見ニ出シヨリテ歸リ藩ニシテ
山陰道鎮撫總督西園寺公朝王ニ隨從シ山陰諸
藩ノ鎮撫ニ勉ムヨリテ徵士ニ召サレテ行政官ニ仕ヘ議
政官ニ屬シ車加馬ノ東幸ニ供奉先ニ發テ仰付ケラレ
創設ノ彈正臺ニ大忠ト爲ル後神祇官ニ出仕シテ
大祐ヨリ少輔ニ進ミ正五位ニ陞叙セラル官廢シテ
教部省ヲ置カルヤニ出仕シヨリテ教部大丞ニ任
セラレ教月ノ後病テ歿ス

大正八年十月十日
決裁大正八年十月十日
爵位課長

言及事務官

電部案

大正八年十月十日

官内事務官

兵庫縣^{須磨}大本官
(至急)

官内大臣秘書官

照任り裁可済明十九日午前十時頃表
ノ豫定ナリ書類ハ以日午前送込ス

大正八年十月十日

仙石官内事務官

兵庫縣須磨大本官

官内大臣秘書官

都令ニ依リ書類ハ明日ノ午後發送ス

大正八年十月十日

(七六)

七八五
七五

立案 大正八年十月五

決裁 大正 年 月 日

爵位録長



宗族家系



官廳事務



贈位傳達案

故從四位下青山忠裕

特旨より位階追陞せらる

故從四位下青山忠裕

贈從三位

左ノ通奉日 宣下相成并案此旨及傳
達形也

大正八年十月十日 案秋寮沼裁
子壽青山忠精

特片ヲ以テ位階追陞セラル
故從左下淺野長直
故從左下淺野長直

前同文
贈從左

大正八年十月十日 案秋寮沼裁
後壽淺野長直

故從左下仙石政展

めくられず

時より時位階進陞あり

故從下仙石返辰

時從三位

前日

大正四年十月廿二日 宗親宗法親

子者沙石返辰

故從下仙石返辰

時より時位階進陞あり

故從下仙石返辰

時從三位

前日

大正四年十月廿二日 宗親宗法親

子者沙石返辰

故從下仙石返辰

時より時位階進陞あり

故從下仙石返辰

時從三位

前日

大正四年十月廿二日 宗親宗法親

子者沙石返辰

故從下仙石返辰

時より時位階進陞あり

故從下仙石返辰

贈正三位

前同文

大正四年十月十日 宗秩家法裁
伯耆和平親王

故从五位下 山内一豊
山内忠義

特旨ヲ以テ位階進陞セラル
故从五位下 山内一豊
山内忠義

贈從三位

前同文

大正四年十月十日 宗秩家法裁

後長山内典藥

故從五位下 關 政富

特旨ヲ以テ位階進陞セラル
故從五位下 關 政富

贈從四位

前同文

大正八年十月十日 宗秩家法裁
子爵関 博直

故 公 重遠

特旨ヲ以テ位記ヲ賜ラル
故 公 重遠

贈正五位

前日又

大正八年十月十日 宗睦齋信哉
子吾居儀一

特旨ヲ以テ位階追陞セラル
故從五位勳四等小室信夫

贈從四位

君ノ通奉日 宣下相成其來其遺後、侍奉
方以計之、存位記并存令ハ追テ可及
回至也

大正八年十月十日 宗睦齋信哉

東京府知事

別紙参照

東京市女坂三新坂町四丁目五番地
小室信夫遺族 小室 三吉